

# 『資本論』と『純粹理性批判』 — マルクスのカント哲学摂取 —

内田 弘

## [1] カント批判と天文学史 — マルクス「差異論文」の問題像 —

マルクスは1841年に学位論文「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異」（以下「差異論文」と略）をイェナ大学に提出し学位を取得した。「差異論文」の主題は「カント批判および天文学史」である。<sup>1)</sup>

〔古代哲学におけるカント認識論の不成立〕「差異論文」でマルクスは、カントの『純粹理性批判』の認識装置である「感性・知性・理性」がカント以前の遙か昔の古代の哲学者の間で破産＝解体していたことを、デモクリトスの自然哲学およびエピクロスの自然哲学を分析して、指摘する。

すなわち、エピクロスは感性を信じ知性（Verstand）<sup>2)</sup>には懐疑的である。対するデモクリトスは感性を疑い知性を信じ知性による分析対象（事実）を地の果まで旅をして探し求める。エピクロスもデモクリトスも原子（アトム）を認識するかぎりでは理性を認める。このように感性・知性・理性はエピクロスとデモクリトスにおいてばらばらに解体し、カントが『純粹理性批判』で論じる遙か前に感性・知性・理性のトリアーデは解体していたと指摘する。マルクスは、デモクリトスおよびエピクロスの自然哲学的断片の顕微鏡的な解説作業をとおして、この解体を論証したのである。カントの解体された「真理の論理学」は、如何にして「仮象の論理学」として再定義できるかを追跡した過程が、マルクスの『資本論』形成史である。

〔カント・アンチノミー批判〕さらに、マルクスは、エピクロスの自然哲学的断片（特に自然哲学ノート第一）に、カントの「アンチノミー」に対応する命題を精緻に検出する。その結果、奇妙な結論に帰着することに気づく。

エピクロスの原子は自由な運動体である。デモクリトスの原子のような直線運動をするのではなく、曲線（クリナーメン）を描く。エピクロスの原子は、相互に「要素」として接合し「集合」になる可能態である。原子は「要素かつ集合」である。原子は接合してより大きな存在になり、「自己の限界を超える」。同時に、原子は多数の原子ならなる集合より小さい原子でありうるあるから、或る始元より以前に遡及可能である。したがって、カントの「第1アンチノミー」《より前の始元は措定できるか否か、或る限界を超えられるか否か》は成立しない。

原子は「要素かつ集合」であるから、全体が部分＝要素からなる集合でありうるし（全体→部分）、部分＝要素は内部に要素を包含する全体＝集合でもありうる（部分→全体）。原子は「要素かつ集合である」という命題では、カントの「第2アンチノミー」《世界は部分からなるのか、世界は全体として存在しているのか》が成立しない。

原子は自由な運動体として他の原子と接合しより大きな存在になる。接合運動が生み出す結果は、夜空に浮かぶ天体である。原子のミクロの自由な運動は、天体という結果を必然的にもたらす。自由は自然必然性に転化する。このパラドックスは、カントの「第3アンチノミー」《人間は自由な存在か、それとも自然必然性に決定されている存在か》が成立しないことを明らかにする。自由と自然必然性は、カントが判断するように相対立せず、両立する。

原子の自由な運動がもたらした天体を民衆たちは、彼らを超越する天体を神として崇める。原子は民衆の心を呪縛する宗教的超越物になる。エピクロスは心の安逸（アタラクシア）を求める自然哲学者である。彼の原子論は心を縛る神を生んでしまう。これはカントの「第4のアンチノミー」《神は存在するのか、存在しないのか》のパラドックスに満ちた帰結である。

このパラドックスは、マルクスに独自の論法を示唆する。マルクスは、論敵の主張の前提を共有する広場（locus communis）から議論を開始し、その前提とは逆の帰結を論証するというパラドックスを『資本論』で展開する。<sup>3)</sup> この論法の原型がエピクロスの原子論に潜在する。その意味でも「差異論文」は『資本論』に継承される。<sup>4)</sup> エピクロスの原子論が「要素＝集合」であることは、のちにみるように、『純粹理性批判』の論理学が「要素＝集合の関数」であることや、『資本論』冒頭商品の「集合かつ要素」規定に対応する。

【地動説の禁圧史】 マルクスのカント批判の動機は、カントが『純粹理性批判』（第一批判）が神の存在証明はできないと判断することで閉じてしまい、宗教批判（さらには経済学批判）の十分な哲学的根拠を与えていない点にある。ローゼンクランツを中心とする「差異論文」当時のドイツのカント学派は何の独創的な研究をおこなわないで、ただ「数珠（ローゼンクランツ＝ロザリオ）を撫で回しているだけである。マルクスの『純粹理性批判』の批判的摂取は、第一批判に「神（神学）＝貨幣（経済学）」を論証する可能性を探究することにある。ではなぜ、マルクスは宗教批判の哲学的根拠をもとめたのであろうか。天動説から地動説へのコペルニクス革命を中心とする近代科学革命の成果を、カトリックを中心とする宗教権力が禁圧してきたからである。

ガリレオの『星界の報告』（1610年）に示されているように、人間の視覚能力を拡張する望遠鏡で月の表面を正確・詳細に観察すると、月を含む天体は起伏が一切ない完全な球体であるというキリスト教会の説とはまったく異なり、月の表面には複雑で不規則な凹凸（クレータ）がある。月はこの点で地球の表面の地理的特徴と同じである。地球から月へのこの類推を逆にすれば、地球も月と同じ天体の一つではないかと推定される。ガリレオはこうして間接的に天動説を批判し地動説の正しさを暗示した。感性（視覚）と知性の間を、知性（光の屈折理論）の実践的応用である屈折式望遠鏡が媒介する。<sup>5)</sup> 望遠鏡による天体の観察はその批判力を潜在する。

その6年後の1616年、ガリレオは『天文対話』を発刊したため、カトリックの異端尋問にかけられ、その書は発禁処分を受けた。その206年後の1822年までカトリックは、地動説を主張する書物の刊行を禁止する。その禁圧史は、宗教は無条件に知性を超越するという没知性的な傲岸の支配史である。1822年といえば、マルクスは生まれて4年後である。1822年ようやくガリレオの『天文対話』の発禁が解かれた。<sup>6)</sup> 現在ではカトリックはしぶしぶ地動説を認めるようになりはしたものの、マルクスの当時もなお非科学的な宗教イデオロギーとしての天動説が支配していた。『資本論』形成史は「天文学史的ルネサンスの系統」に位置づけるとき、はじめてその真実を開示する。

〔禁書・スピノザ全集の再刊〕 その約40年前の1802-03年にイエナでスピノザ全集が刊行される。<sup>7)</sup> 《エピキュリアン無神論者》と論難されたスピノザの著作である。最初のスピノザ全集の1678年の発刊禁止以来、約125年間の長い期間、禁圧状態が続いてきた。再刊されると、ヘーゲルを始めとする当地の哲学者たちはスピノザを取りあげ論じる。ヘーゲルの論文「信仰と知」（1802年）<sup>8)</sup> にスピノザが登場するのは問題的禁書が刊行されたからである。そのヘーゲルのテキストにも、画期的な出来事で沸き立つイエナの知的興奮が<sup>にじ</sup>滲みでている。その興奮は若きマルクスにまで持続する。「差異論文」執筆の際、そのスピノザ全集に収められた『神学・政治論』を自然哲学的観点から独自の順序でそのノートを取り、スピノザの政治哲学は民主制に帰着すること、しかもその民主制は貨幣制度を同型であることを確認した。<sup>9)</sup> その確認は、約17年後の草稿『経済学批判要綱』「貨幣に関する章」に再現する（MEGA, II/1.1, S.96）。

〔カントの物神崇拜批判〕 カント（1724-1804）は若き頃の自然哲学書『天界の一般自然史および理論』（1755年）で、無神論者エピクロスの自然哲学（原子）で天体の運動の原理的説明を行いつつも、宇宙の究極の根拠は神にあると主張する。この二元論で、「カント＝エピキュリアン＝スピノザの無神論者」という教会＝世俗の論難を回避した。カントは「（巧みに宗教弾圧から逃れた）デカルトのポリテューク」（林達夫）に類似した「カントのポリテューク」で不合理な事態に対応したのである。マルクスが「差異論文」でエピクロスを自然哲学だけでなく、その延長上に宗教哲学問題（天体崇拜）をすえたのは、カントのその二元論を批判するためである。しかしカント自身も、すでに三批判書を刊行したあと、スピノザ全集刊行の約10年前の1793年、宗教哲学論文の発禁処分に遭い弁明書を提出した。その論文を取めた宗教哲学書『単なる理性の限界内の宗教』の印刷を「生涯の街ケーニヒスベルク」でなく、密やかにイエナで行なった。カントも宗教権力の受難者である。カントはその宗教書でなおも、神への奉仕を「物神崇拜（Fetischmachen）」に変質させる宗教勢力を批判し、聖職制を「物神崇拜（Fetischdienst）」であると論難した。<sup>10)</sup> 「物神崇拜（Fetischismus）」に対する批判こそ、『資本論』を貫徹する基本視座である。

カントは、コペルニクス以来の天文学史上の旋回に衝撃を受け、人間の認識能力の限界を痛感する。特にケプラーの三法則に代表されるような、人間のこれまでの認識能力の限界（天動説）を超えて、天体の観測データを統合的に説明する科学的理論（地動説）が成立するのは、何に根拠をもつのであろうかと熟慮し、それを根拠づける理論哲学の樹立に取り組んだ。カントのその問題構成は『純粹理性批判』（第一批判）に集約される。感性が受容する経験的データを判断する知性（悟性 Verstand）そのものの体系の一貫性のある根拠づけを行わなければならない。それが第一批判の前半の超越論的分析論の主な作業目標である。その作業場である「（新しい）形而上学 [の建設] はむしろひとつの闘技場（ein Kampfplatz）である」（BXV）。<sup>11)</sup> これが第一批判に取り組むカントの基本姿勢である。この形而上学とは自然学（フィジカ）のあと（メタ）の学問、即ち、自然哲学のことである。カントは人間の精神の自由のために沈着に闘う哲学者である。第一批判の最後で、宗教哲学の可能性を極めて狭く絞り込み、神の存在証明はできないと限定し、人間理性の迷い（仮象）の哲学的根拠づけを行った。

〔カントとマルクスに共通なもの〕 それでは、「差異論文」の問題である「カント批判および天文学史」はマルクスの若き日の「差異論文」のみに妥当するエピソードであろうか。そうではない。

マルクスは「差異論文」のカント問題を堅実に『資本論』まで継承する。『資本論』は哲学的には何よりも先ず『純粹理性批判』の批判的継承なのである。

以下では、この継承関係を『純粹理性批判』および『資本論』の問題像・用語・方法における共通性を掘り起こし確認する。すなわち、「要素＝集合」・「二重の観点（複眼）」・「旋回」・「要素分析＝編集法」・「カテゴリー」・「仮象」・「不変なもの」など、両者に共通するものを、この順序で考察する。

## [2] カントおよびマルクスの「要素＝集合」

### [2-1] カントの「要素＝集合」

カントは『純粹理性批判』で、感性で受容した経験的データを分析する基準である超越論的分析論は、一切の経験的なものを排除した、「統一性・真理性・総体性」(B114)を貫徹する概念の体系である、と規定する。「超越論的分析論は、我々のアプリオリな認識全体を純粹な知性認識の諸要素 (Elemente) へと分解する」(B87)という。分析論の諸要素は純粹知性概念 (カテゴリー) である。「カテゴリーの表」は完全であり、純粹知性の全領域を完全に満たす。カントは、「要素」としてのカテゴリーが如何に組織されるかについて、つぎのようにのべる。

「我々の表象の分析に先立って、なによりもまず表象が与えられていなければならない。……多様なものの総合がまず一個の認識をもたらす。その認識は、はじめのうちはまだ生のままで混乱していることがありうるために、分析を必要とする。しかし、認識するために諸要素を集合し (die Elemente zu Erkenntnissen sammelt)、或る内容にまとめることは元来、総合 [の役割] である」(B108。[ ] は引用者補足、以下同じ)。

カントは、別の個所 (B89) でネガティブな意味 (寄せ集め) で使う名詞「集合 (Aggregat)」<sup>12)</sup>ではなく、『資本論』冒頭文節の「商品集合 (Warensammlung)」と同じ名詞 Sammlungs の動詞形「集める＝集合をつくる (sammeln)」で表現する。カントは『純粹理性批判』の基本用語に「要素＝集合」を用いているのである。

【要素＝集合の関数】「要素＝集合」は「関数 (Funktion)」(B93)を成す。カントの超越論的分析論は「要素＝集合の関数」である。<sup>13)</sup>例えば、微積分では原始関数は微分されて導関数になる。その導関数はつぎの導関数の原始関数となる。原始関数<sub>1</sub>→導関数<sub>1</sub>＝原始関数<sub>2</sub>→導関数<sub>2</sub>＝原始関数<sub>3</sub>→……。第一批判のカテゴリーは「要素＝集合の関数」で編成されているのである。

### [2-2] マルクスの「要素＝集合」

マルクスは『資本論』冒頭で、資本主義的生産様式を認識する基本用語として「要素と集合」を用い、カントの用語「要素・集合」を継承する。

「資本主義的生産様式が支配している諸社会の富は、《巨魔的な商品集合 (Warensammlung)》として現象し、個々の商品はその富の要素形態 (Elementarform) と現象する。それゆえ、我々の研究は商品の分析から始まる」(S.49: 訳59)。<sup>14)</sup>

『資本論』で商品は、資本主義的生産様式を認識する基本的な要素 (Element) でありかつ集合

(Sammlung)である。或る商品は要素としてより高次の集合としての商品に包摂され、集合としての商品は要素として、さらに高次の集合としての商品に包摂される。冒頭商品(単純商品)の「要素=集合」の関連は、或る商品(Wa)の他の諸商品(Wb, Wc, Wd, ……)への関連(集合Wa=その諸要素Wb, Wc, Wd, ……)、即ち、価値形態の第一形態・第二形態を含意する。同時に逆に、要素(Wb, Wc, Wd, ……)の集合(Wa)への関連(諸要素Wb, Wc, Wd, ……=集合Wa)、即ち、第三形態も含意する。<sup>15)</sup> 価値形態から交換過程を経て貨幣が生成し、貨幣は資本に転化する。資本としての貨幣は生産手段と労働力の購買に充当され、剰余価値を生産する。生産された剰余価値は蓄積されて資本となる。「商品→貨幣→資本→剰余価値→資本蓄積」という諸カテゴリーが「要素=集合の関数」として展開される。

【問いと解の連鎖】 この論理過程を一般化すれば、或る問い(Q<sub>i</sub>)とその解(A<sub>i</sub>)が結合し次の問い(Q<sub>j</sub>)を生みだし、その問いの解(A<sub>j</sub>)が導き出される論理形式となる[Q<sub>i</sub>(Q<sub>i</sub>A<sub>i</sub>) A<sub>j</sub>]。この論理過程における或る前提(問い)とその結果(解)は「要素かつ集合」の二重規定をもつ概念である。諸概念は接合肢(Glieder)をもつ二重なものとして有機的に関連する。概念の接合肢が編成する「要素=集合の関数」こそ、『資本論』を体系に編成する原理(規則)である。<sup>16)</sup>

この原理(規則)は、エピクロスのアトムの原子が運動過程で接合を繰り返すことで、他の原子に含まれる要素であり、かつ他の原子を含む集合であるという二重性と同型である。「差異論文」のアトムの二重規定は経済学の諸概念の有機的関連に継承されている。この二重性は、或る経済学のカテゴリーは一面で「終点」であり同時に「始点」でもあるという二重性をもつことと同型である。<sup>17)</sup> 包摂と被包摂の二重性こそ、資本主義的生産様式の運動過程の組織原理である。

【要素・集合の従来訳】 つぎに、『資本論』の基軸概念であるWarenammlungとElementarformが、従来の日本語訳ではいかに訳されているかを確認する。

- (a) 高島泰之訳(1925年、新潮社)「商品集積・成素形態」。
- (b-1) 長谷部文雄訳(1957年、青木書店)「商品集聚・原基形態」。
- (b-2) 長谷部文雄訳(1964年、河出書房)「商品集成・成素形態」。
- (c) 大内兵衛・細川喜六監訳(1967年、大月書店)「商品の集まり・基本形態」。
- (d) 向坂逸郎訳(1969年、岩波文庫)「商品集積・成素形態」。
- (e) 江夏美千穂・上杉聰彦訳(1979年、フランス語版、法政大学出版会)「商品の集積物(accumulation de marchandises)・要素形態(forme élémentaire)」(原典はフランス語版初版の極東書店、1976年の復刻版による)。
- (f) 資本論翻訳委員会訳(当該章担当者・平井規之)(1982年、新日本出版社)「商品の(巨大な)集まり・要素形態」。
- (g) 中山元訳(2011年、日経BP社)「商品の集まり・要素形態」。

【既訳の比較検討】 高島訳の「商品集積」と「成素形態」は両方とも向坂訳に継承されている。高島訳の「成素形態」は河出版の長谷部訳も継承されている。高島訳は先駆的である。大内・細川監訳の「商品の集まり」は資本論翻訳委員会訳に継承されている。

WarenammlungとElementarformは、カント『純粹理性批判』の語法をマルクスが継承したものである。このことを知っていれば、それぞれ「商品集合」と「要素形態」と訳したはずである。

その点、資本論翻訳委員会（平井）訳は、前者を「商品の集まり」、後者を「要素形態」と訳して、マルクスが込めた原意に近い訳（商品の集まり）や適訳（要素形態）になっている。中山訳は平井訳を踏襲したのであろうか。フランス語版訳の「要素形態」も適訳である。資本論翻訳委員会の翻訳には、各国の『資本論』の翻訳につけられた訳注を取り入れ、『資本論』読解に寄与している。もし用語「要素・集合」が『純粹理性批判』に由来することを知って行った訳であれば、訳注にこの旨のことが注記されていたはずである。それがないことから判断すると、訳者はその語誌を知らないで、そのように訳したと推察される。<sup>18)</sup>

### [3] 同一対象の二側面の分析

#### [3-1] カントの複眼

『純粹理性批判』と『資本論』には共通するものが、さらにある。「同一対象を二つの側面から分析する」という方法である。

〔頑固な感覚〕 今日では地球の周囲を太陽が回転するのではなくて、地球が太陽の周囲を楕円運動で公転していることは多くのひとが知っている。しかし、人間の感覚は頑固である。地動説の正しさは理論では知っていても、感覚はその理論にしたがわず、太陽が地球の周りを回転しているかのような天動説的な感覚をけっして変更しない。人間が地動説に対応する感覚をもつのは、人工衛星に乗って地球と太陽の双方が見える相対的な宇宙空間に移動したときであろう（地球←人工衛星→太陽）。しかしそこでも、人間の感覚は見えるように見ているのである。人間の感覚は判断しない。判断するのは知性である。

しかし、知性は判断を誤り、虚偽を真理として主張することもある。感覚的データを一貫して配列する、正確な判断基準は、経験の対象を超越した「ただ思惟可能なもの」によって建設されなければならない。カントは『純粹理性批判』「第2版序文」でつぎのように指摘する。

「我々は**同一対象を**、一方では経験にとっての感覚および知性の対象として考察できるとともに、他方では**我々が単に考えるだけの対象として**（als Gegenstände, die man bloß denkt）、とにかく経験の限界を超えようと努める孤立した理性にとっての**対象として**、したがって、**二つの異なった側面から**（von zwei verchiedenen Seiten）**考察することができる**」(BXIX、ボールド体は引用者)。

感覚が受容したデータを知性が分析するけれども、その知性は真偽を弁別する基準でありうるのか、その検証をパスしたものでなければならない。その基準は「超経験的な・自然哲学的な」という意味で「統一性・真理性・総体性」(B114)をもつものである。その新しい自然哲学的な論理学が経験に媒介される時、「超越論的演繹」となる。「《超越論的》とは、経験という与えられたものが必然的に我々のア・プリオリな表象に従属するとともに、それと相関して、ア・プリオリな諸表象が必然的に経験に適応されるさいの原理の性質を示す」。<sup>19)</sup> カントが『純粹理性批判』の前半の特に分析論で腐心したのは、まさにこの二重の課題を遂行する作業である。

〔コペルニクス革命の意義〕 人間の認識能力の吟味という同一課題は、二つの側面から再検討することである。特に後者の超越論的分析論の探求は、コペルニクス革命が提起した課題に哲学的に

根本的に応えるものである。<sup>20)</sup> 近代科学革命は、思惟そのものが経験論的な事実を超えた次元で立法行為を遂行しなければならないことを要請する。カントはその要請に応えるのである。ヒュームたちの経験論がこの超越論的な問いを欠いたために、経験論の内部での堂々巡りの懐疑論に陥り、感覚的经验を超えるところに真理基準をもたなければならないという課題を樹立できなかつた。<sup>21)</sup> カントは天動説から地動説に旋回するような観点を哲学的に根拠づける超越論的分析論として樹立する。その必要性を、つぎのように論じる。

「経験自身は知性を必要とする一つの認識様式である。知性の規則は対象が私に与える以前に、私の中に、すなわちアプリアリに前提されなければならない。この規則はアプリアリに諸概念において表され、したがって経験の対象はすべて必然的にこれらのアプリアリな諸概念に従い、それらと一致しなければならない」(BXVII-XVIII)。

一貫性をもって経験的データを配列する超越論的分析論は、経験を超えた基準に適合する「概念の合法性」(B117)をもつ。

【観点の旋回】 カントは、同一対象を二重に考察する必要を説く文の近くで、コペルニクスの名前をあげて、事物をみる観点を旋回することが決定的な意味をもつことを指摘する。

「コペルニクスは、全天の星が[地上にいる]観測者の周囲を旋回している(drehe sich)と想定するすると、天体の運動をどうしても明確に説明できなかつた。そのためコペルニクスは試しに、観測者を旋回させ(sich drehen...ließ)、それに対応して星を静止させてみたのである」(BXVI-XVII)。<sup>22)</sup>

地上にいる観測者を固定し、その観測者を中心軸に天体を旋回する方法は天動説となる。それとは反対に、試しに(仮説的に)、地上にいる観測者自身が観測対象(天体)を軸に旋回するように観点を変換すると、観測者がいる地球が天体の周囲を旋回することになるから、その観点の変換は地動説を胚胎する。観測者の観点の変換は宇宙像を旋回する可能性を孕む。その旋回は天動説と地動説を対称的に配置する。この対称性は、コペルニクスの『天体の回転について』での言明「世界の形とその部分が不変の対称性をなす」ことに対応する。<sup>23)</sup>

### [3-2] マルクスの複眼

マルクスは、同一対象を二つの面から考察するカントの方法を経済学批判に継承する。カントのその方法に重ねて、マルクスは『資本論』第1部第1章第2節の冒頭文節でつぎのように書く。

「商品は最初に二面的なものとして(als ein Zwieschlächtiges)、すなわち、使用価値および交換価値として我々の前に現象した。……商品に含まれる労働のこの二面的性質[具体的有用労働および抽象的人間労働]は、私によって『『経済学批判』(1859年)で]初めて批判的に(kritisch)指摘されたことがらである。この点は経済学の理解が旋回する飛躍点であるから(Da dieser Punkt der Springpunkt ist, um den sich das Verständnis der politischen Ökonomie dreht)、ここで立ち入って解明しよう」(S.56: 訳70-71。[ ] 引用者挿入。訳文大幅変更)。

【商品の二面性の根拠】 マルクスは、同一の認識対象を具体的側面と抽象的側面の二面から考察するカントの観点を継承する。しかも、「批判的」や「旋回する」というカントの語法で、直前の第1章第1節における商品を使用価値と交換価値の二つの属性に分析したことを回顧する。その二

つの属性の根拠を人間の労働の二面性として、すなわち、使用価値を生み出す「具体的有用労働」と、相異なる使用価値の交換比率の根拠としての価値の根拠としての「抽象的人間労働」に分析する。価値はすぐれて抽象的な存在であり、カントのいう自然哲学の対象・「単に考えるだけの対象」である。カントのその概念にならって、マルクスは『資本論』以前の『経済学批判要綱』で、経済学の価値を「単に思惟されうるもの (nur gedacht werden können)」と規定する (MEGA, II/1.1, S.78)。

〔古典経済学の《価値》の二重性〕 マルクスにとって、カントのいう「単に思惟可能なもの」としての自然哲学的概念に対応するのが、古典経済学がそれとは知らず用いる「価値」である。スミスは「価値 (value)」概念に「使用価値 (value in use)」と「交換価値 (value in exchange)」の両方を一括する (『国富論』第1編第4章)。交換価値は相異なる使用価値どうしの交換比率である。その交換比率は或る通約可能な基準 (Kommensurabilität, symmetria) に還元されなければならない。それは何か。この問いにスミスは明確に答えられない。価値は人間が感触できない存在である、とまではいう。とすれば、価値とはただ人間が思惟できるのみの存在ではないか。(1) 思惟された価値と交換価値はどのように関連するのか (価値形態論)。スミスが「世故の人 (persons of prudence)」が物々交換の不便を解消するために導入したという (2) 貨幣は、交換価値とどのように関連するのか (①価値形態論→②商品物神性論→③交換過程論)。問いとして連続する (1) と (2)こそ、マルクスが経済学批判の原理を把握するために立てた基本問題である。

経済学の「価値それ自体」は単に思惟可能な存在であり、形而上学的存在である。マルクスは『資本論』第1部第1章第4節の商品物神性論の冒頭で、商品は感覚的な存在であり、かつ超感覚的・形而上学的な存在であると規定する。そうするのは、経済学批判の主要な分析基準である価値が、カントの超感覚的・超越論的な論理学の対象に対応し、しかもその価値が感覚的・経験的な使用価値に現象するからである。カントの分析論と感性論が媒介しあい超越論的演繹を構成するように、マルクスの価値と使用価値は媒介しあい『資本論』の編成原理である①価値形態論・②商品物神性論・③交換過程論を構成する。<sup>24)</sup>

〔『資本論』の天文学史的記述〕 マルクスは『資本論』で、天動説から地動説への旋回に対するカントの見解に経済学批判をつぎのように重ねる。

「競争の科学的分析が可能なのは、資本の内的本性が把握されるときに限られる。それと全く同じように、天体の見掛けの運動 (die scheinbare Bewegung der Himmelskörper) は、感性では知覚できない天体の運動を認識する人だけが、天体の現実の運動として理解できるのである」 (335: 訳552)。

鏡の外に実在する自己が鏡の中の鏡像に対応するように、天動説から地動説への転回は、観点を180度回転する「回転対称 (rotational symmetry)」に相当する。そのことを念頭に、コペルニクスは『天体の回転について』で、数多の天文学者はその「不変の対称性」が分からないと指摘している。コペルニクスが天文学で達成した旋回に対応する課題に、カントは『純粹理性批判 (Kritik)』で取り組み、マルクスは経済学批判 (Kritik) で取り組んだのである。

〔研究法と記述法〕 カントとマルクスの発想上の共通点がさらにある。先の〔カントの要素=集合〕でカントから引用した、



「我々の表象の分析に先立って、なによりもまず表象が与えられていなければならない。…多様なものの総合がまず一個の認識をもたらす。その認識は、はじめのうちはまだ生のままで混乱していることがありうるために、分析が必要である」(B108)

を念頭に、マルクスは『資本論』第2版の後書で「研究法と記述法」をつぎのように特徴づける。

「研究は、素材を詳細にわがものとし素材のさまざまな発展諸段階を分析し、それらの発展諸形態の内的紐帯をさぐりださなければならない。この仕事をなしとげたあとはじめて、現実の運動をそれにふさわしく記述できる。これに成功し、素材の生命が観念的に鏡映されれば (sich widerspiegeln)、あたかも《アプリオリな (a priori)》構成に関わりがあるかのよう、思われるかもしれない」(S.27: 訳27)。

経験的な研究素材は自動的にその記述順序を開示しない。研究対象は「要素＝集合の関数」に分析されてこそ、あたかも命ある有機体のように、要素が集合に包摂され首尾一貫した編成が可能になる。それが『要綱』がいう「精神的な再生産」としての記述法(のちにみる、カントのいう「上向法」)である。その記述はカントのいう《アプリオリな構成》として読者に現象する。

【《旋回する》の従来訳】 カントの『純粹理性批判』の用語「旋回する (sich drehen)」を継承するマルクスの用語は、これまでの日本語訳で適確に訳されてきたであろうか。以下で点検する。

- (a) 高島泰之訳 (1925年、新潮社)「而して比問題は、経済学を理解するについての軸点であるから、茲に詳しく闡明する必要がある」。
- (b-1) 長谷部文雄訳 (1957年、青木書店)「この点は経済学を理解するための軸点であるから、ここに、より詳しく解明することとしよう」。
- (b-2) 長谷部文雄訳 (1964年、河出書房)「この点は経済学を理解するための軸点であるから、ここに、より詳しく解明することとしよう」(青木書店版と同じ)。
- (c) 大内兵衛・細川喜六監訳 (1967年、大月書店)「この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない」。
- (d) 向坂逸郎訳 (1969年、岩波文庫)「この点が跳躍点であって、これをめぐって経済学の理解があるのであるから、この点はここでもっと詳細に吟味しなければならない」。
- (e) 前掲江夏・上杉訳「経済学はこの点をめぐって研究するものであるから (原文 Comme l'économie politique **pivote** autour de ce point)、ここではもっと詳細な細目に立ち入らなければならない」(原典前掲書)。
- (f) 資本論翻訳委員会訳 (当該章担当者、平井規之) (1982年、新日本出版社)「この点は、経済学の理解にとって決定的な点であるから、ここで立ち入って説明しておこう」。
- (g) 前掲 中山元訳「これは経済学を理解するための跳躍点となることなので、ここでさらに詳しく解明しておくべきであろう」。

【既訳の比較】 高島の訳文「経済学を理解するための軸点である」のうちの用語「軸点」は、経済学理解の観点を旋回する中心点というニュアンスを含んでいる点は評価できる。長谷部訳は高島の訳語「軸点」を継承して、このニュアンスを保持している。大内・細川監訳では「経済学の理解にとって決定的な跳躍点である」の訳語「決定的な跳躍点」のうち「跳躍点」は原文 (Springpunkt) にあるが、「決定的な」はない。「旋回する (sich drehen)」を「決定的な」と表現したのである

うか。資本論翻訳委員会訳は、大内・細川監訳「経済学の理解にとって決定的な跳躍点である」をほぼ継承し「経済学の理解にとって決定的な点である」と訳し、大内・細川監訳の「跳躍」を省いている。

向坂訳では「これ〔跳躍点〕をめぐって経済学の**理解がある**から」と意味不明な訳となっている。高畠訳と長谷部訳は訳語「軸点」で「旋回する」の含意を伝えている。大内～細川監訳・向坂訳・資本論翻訳委員会訳はみな肝心のカントの語法「旋回する」を再現していない。<sup>25)</sup>

フランス語版の原典では元々「経済学がこの点〔商品に表現されている労働の二重性格〕をめぐって**旋回する** (pivoté autour de ce point) ので」と書かれ、《労働の二重性格を理解することを梃子にして、経済学の理解が全く変わる》というコペルニクス＝カント的含意が明示されているのに、それが生かされないで、「研究する」と誤訳されている。中山訳でも「旋回する (sich drehen)」が訳されていない。このように、従来の当該個所の翻訳では、天動説から地動説への視座の変換を意味する、カントの語法 (sich drehen) をマルクスが継承していることに気づいていない。なお、中山にはカント『純粹理性批判』の訳業がある。

## [4] カントからマルクスへの体系編成法の継承

### [4-1] カントの「要素分析」＝体系編成法

カントの『純粹理性批判』第2版序文の複眼的な観点は、『資本論』に商品を二面的性質「使用価値と価値」に分析する観点を示唆した。しかしカントの「二重なものへの要素分析の観点」はその序文だけに限定されない。第一批判全体の編成法となっているのである。しかもその編成法は『資本論』の編成原理に継承されている。論理学が一貫性・総体性をもつように、その継承関係も一貫し総体的である。『純粹理性批判』の基本的構成はつぎのとおりである。

#### I 超越論的原理論 (B33-732)

##### 第1部 超越論的感性論 (B33-73)

##### 第2部 超越論的論理学 (B74-732)

##### 第1部門 超越論的分析論 (B89-349)

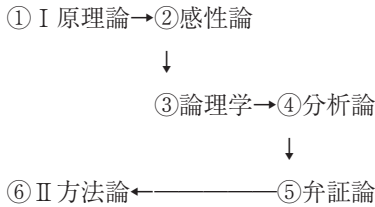
##### 第2部門 超越論的弁証論 (B349-732)

#### II 超越論的方法論 (B735-884)

感性論40頁、分析論260頁、弁証論383頁、方法論149頁が当てられている。『純粹理性批判』の主題は弁証論＝「仮象の論理学」にあるという三枝博音＝石川文康説が頁数の明確な差異（分析論260頁：弁証論383頁）に示されている。

同時にここで注目すべきことは、『純粹理性批判』の独自の編成法である。第一批判は《I [1→2 (1→2)] →II》という「三重の要素分析の体系」をなす。即ち、『純粹理性批判』はI原理論とII方法論の2つの要素に分析される。前者のI原理論は感性論と論理学の2つの要素に分析される。その後者の論理学は分析論と弁証論の2つの要素に分析される。その後者の弁証論は最初のIとIIへの区分のうち後者のIIの方法論に連結する。これを図式化すればこうである。

『純粹理性批判』



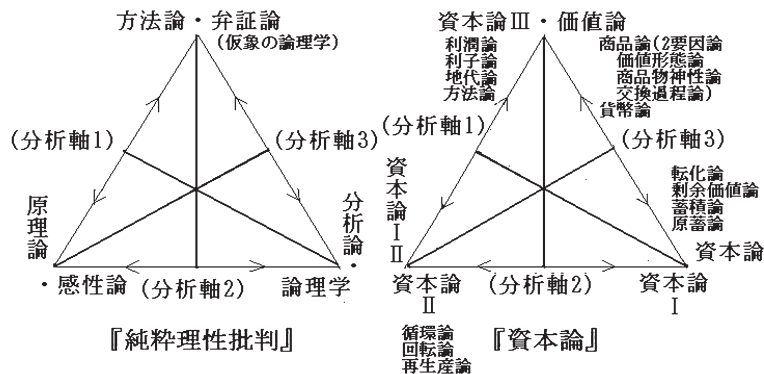
このように『純粹理性批判』は三重の要素分析法で編成されている。第一批判「第2版序文」でいう「同一物への二重の観点」は第一批判全体を編集する方法として貫徹する。『純粹理性批判』は、三層に分析された対称的な理論諸要素がなす重層的な集合である。しかも最後の理論要素である弁証論は最初の要素＝II方法論に連結＝再帰する。

[4-2] 『資本論』も三重の要素分析で編成されている

〔『資本論』の三重の要素分析〕 『純粹理性批判』の重層をなす三重の要素分析は『資本論』に継承されている。まず『純粹理性批判』の原理論と方法論への要素分析に対応するように、『資本論』全3部編成は、価値タームで資本が論じられる「第1部と第2部」が一括され、その「第1・2部」と、生産価格タームで資本が論じられる「第3部」とに分析される。ついで原理論が感性論と論理学に要素分析されるように、『資本論』の第1部と第2部は単数資本（1つの資本）の第1部と複数資本（生産手段部門と生活手段部門の「2つの資本」）の第2部へ要素分析される。さらに論理学が分析論と弁証論に二分されるように、第1部は「第1編 商品と貨幣」とそれ以後の「資本論」に要素分析される。こうして『資本論』体系は三重の要素分析法で編成されている〔図「『純粹理性批判』・『資本論』の三重の要素分析編集法」参照〕。

〔『価値論』の三重の要素分析〕 要素分析法はさらに、『資本論』の基礎理論としての価値論の編成である、①価値形態論・②商品物神性論・③交換過程論にも貫徹する。『資本論』第1部第1章第

《『純粹理性批判』・『資本論』の三重の要素分析編集法》



『資本論』第3部「主要草稿」(MEGA, II/5)の最後の「第7章 収入とその源泉」の「1.三位一体範式、2.生産過程の分析のために、3.競争の仮象(Schein)、4.分配=生産諸関係、5.諸階級」は『純粹理性批判』の最後の超越論的方法論に対応する。

1・2節で、資本主義的生産様式が支配する社会の富が「要素=集合」としての商品に転化している事態を指摘し、その基軸概念である商品が使用価値と交換価値の2つの要因からなると分析し、両者を生む労働を、使用価値の自然実体としての「具体的有用労働」と社会実体としての「抽象的人間労働」に分析する。商品とは「使用価値と価値」という二つの要因の統一態である。2つの要因「使用価値と価値」を基本概念にして『資本論』は展開される。この核心を念頭に、「この点[労働の二面的性質を明確に把握すること]は経済学の理解が旋回する跳躍点である」とマルクスは指摘する。『純粋理性批判』の要素分析法は『資本論』に継承されて、経済学理解の旋回軸を定礎するのである。

すなわち、商品関係の理論的な内容は、第1章の第3節の価値形態論と第4節の商品物神性論に分析される。価値形態論は、価値形態に一般的等価形態(→貨幣形態)が実現しうる理論的な可能性を論証する。第2章の交換過程論はその理論的可能性が交換過程で実践的に実現することを論証する。交換過程は「価値の実現」と「使用価値の実現」とのアンチノミーが止揚される「実践的な実現過程」である。カントによる「理論的と実践的」の区別(後述)が、この要素分析法の論証に継承される。『資本論』の「価値論」は、理論的分析と実践的論証への要素分析で編成されている。

さらに、前者の理論的分析は、第3節の価値形態論と第4節の商品物神性論への要素分析法で編成される。しかも、前者の価値形態論は基本的には第一形態・第二形態・第三形態からなる。そのうち、第二形態は「第一形態の諸等式の総計」(S.79: 訳110頁)であるから、第一形態と第二形態は一括され、両形態と第三形態に分析される。さらに第一形態と第二形態に分析される。最後に、『資本論』冒頭第1章の第1・2節は商品を使用価値と交換価値に要素分析され、経済学を理解する旋回軸を措定される。<sup>26)</sup>

このように要素分析法の形式で『資本論』は『純粋理性批判』と同型なのである。『純粋理性批判』の順序が「上向法」(カント)の順序であるに対し、『資本論』のここでの順序は「下向法」(カント)でみた順序である。当然、『資本論』の「上向法」の記述順序は『純粋理性批判』とは逆になる。方法論も最初になる。マルクスは方法論のこの位置を『経済学批判要綱』「序説」で採用し、『経済学批判』刊行のときにも冒頭に置こうかと一時は考えたが、結論を最初に置くことは、読者が著者に同伴し一緒に考えることの妨げになると判断し、最後に置くことにしたのである。

図解にあるように、『純粋理性批判』最後の「II 超越論的方法論」に対応するものが『資本論』第3部最後の5つの章である。「序説」内容を改訂し展開したものが、その5つの章である。第一批判の超越論的論理学の後半は「仮象の論理学」としての弁証論であり、その後に超越論的方法論が続く。『資本論』の最後の方法論では「第50章 競争の仮象(Schein)」が書かれている。このことは、『資本論』が『純粋理性批判』の「仮象の論理学」としての弁証論から方法論への順序を念頭に置いていることを示唆する。『経済学批判要綱』の事実上の最後が断片「疎外」(MEGA, II/1.2, S.697-699)であること、加えてその断片で『資本論』第3部51章と同じ「生産諸関係と分配諸関係」も論じられていることは、断片「疎外」も『純粋理性批判』の最後におかれた方法論を念頭に置いていることを示唆する。

『純粋理性批判』と『資本論』の同型性』『純粋理性批判』と『資本論』に潜在する、このような三重の要素分析法は、拙著『資本論のシンメトリー』で解明した『資本論』の編成原理の別の表

現である。すなわち、①価値形態が価値(V)の使用価値(U)による表現[V(U)]である(価値と使用価値の第1の要素分析法)に対して、②商品物神性は価値が使用価値で表現し尽くされようとすることで、あたかも価値の表現媒態である使用価値が価値そのものであるかのような現象形態=仮象[U(V)]となる。ここから交換価値を価値と同一視する誤謬が生まれる。これは価値形態[V(U)]の形態の価値と使用価値を逆転した形態である(第2の要素分析法)。<sup>27)</sup>この逆転とは、価値形態における価値の表現媒態である使用価値(U)が実は価値(V)の仮象形態であること《U[V(U)]》を意味する。③交換過程は「価値の社会的実現」と「使用価値の社会的実現」が相互に同格に実現しようとするアンチノミーであるから、[V(U):U(V)]と表現できる。これはさきの仮象形態《U[V(U)]》の中央の価値(V)を対称的鏡面にして右[V(U)]と右[U(V)]に鏡映したもの[V(U):U(V)]である(第3の二分法)。①価値形態[V(U)]に②商品物神性[U(V)]が包摂された形態が③交換過程[V(U):U(V)]である。この三者の関係は、のちにみるように、カント理性推論で、①大前提に②小前提が包摂された形態が③結論であるのと同型である。こうして、『資本論』の「価値論」という基礎理論から「三重の要素分析法」で編成されていることが判明する。『資本論』は『純粹理性批判』と編成原理で基本的に同型なのである。<sup>28)</sup>

〔謎解き『資本論』〕 このように『純粹理性批判』の編成原理の『資本論』への影響は極めて深い。深いのに、いや、深いからこそ、マルクスは『資本論』第1部でカントの名も、『純粹理性批判』の書名も、一切指摘せずに隠している。しかも「仮象(Schein)」語を始めとする『純粹理性批判』の基本用語を『資本論』で頻繁に規則的に用いている。『資本論』は、資本主義を顕示的に告発する書であるだけでない。その告発に、隠蔽しかつ顕示する修辞学を駆使する。この文体でマルクスは読者に謎を掛ける。『資本論』第1部刊行(初版1867年)以来、読者は謎が『資本論』に隠されていることに気づかなかったというのが真相ではなからうか。とすると、『資本論』は正確に読まれてきたのであろうか。謎は解かなければならない。《謎解き『資本論』》、これが課題である。

## [5] 仮象をめぐるカントとマルクス

### [5-1] カントの仮象論

〔《仮象》語は『純粹理性批判』を貫徹する〕 そこで「仮象」語を基準に両書の関連を考察する。謎解きは、大局の体系編成だけでなく、細部にも注視する。

カントの『純粹理性批判』の1787年刊行の第2版(B版)では、「仮象(Schein)」語は目次での使用の重複を除き、全部で97回も用いられている。『純粹理性批判』(B版)で「仮象」語が出てくるページを示せば、つぎのようになる。

〔目次〕 BXIII (2回)

〔序言〕 B20

〔感性論〕 B55, B69 (2回), B70 (4回), B71 (2回) = [計9回]

〔論理学の構想〕 B86 (3回), B88 (3回) = [計6回]

〔分析論〕 B141, B157, B168, B170, B295, B325 = [計6回]

〔弁証論〕 B349 (3回), B350 (2回), B351, B352, B353 (4回), B354 (5回), B355, B368, B375,

B390, B397 (2回), B426, B428, B432, B433 (4回), B434, B435, B448, B449 (2回), B459, B509, B529, B532, B534, B544, B586, B609, B625, B634, B642 (2回), B643, B670, B697, B730, B731 = [計51回]

[方法論] B737, B739, B768, B770, B776 (2回), B781 (2回), B783 (2回), B787, B791, B797, B802, B811, B815, B820 (2回), B822, B848, B849 (2回), B868, B882 = [計24回]

[合計 = 目次2回 + 序言1回 + 感性論9回 + 論理学の構想6回 + 分析論6回 + 弁証論51回 + 方法論24回 = 99回] (単複・格変化を含む)

目次の2回は本文の中のタイトルと重複するのでそれを省くと、97回となる。

[カントの論証の複合性] 超越論的論理学の後半の弁証論での使用回数が51回と最も多いのは、その主題が「仮象の論理学」であることから当然である。しかし、同時に注目すべきことに、弁証論より前の「序言1回・感性論9回・論理学の構想6回・分析論6回」=合計22回と、「仮象」語の使用回数が頻発するのはなぜであろうか。弁証論以前の特に感性論・分析論の主題は、真理が如何に根拠づけられるのかを、ただ一面的に説くのではない。虚偽が真理であるかのように現象する事態=仮象も同時に論じる。そうするのは、真理(W)の否定態=虚偽の側面を否定=排除すること[W = non(nonW)]で、真理の論証を確証するためである。分析論における要素分析は、区分された対象の両側面は相互に対称性をなす (division into symmetry)。<sup>29)</sup>

第一批判は感性論、知性論、理性論の三つが分離して、積み木を横に並べられたように外接している、と考えるのはまったくの誤解である。感性的データが論理学的分析を媒介されるように、超越論的論理学は複眼で編成されている。これは決して「齟齬」<sup>30)</sup>ではない。感性論は知性論に媒介されて内包され、感性論を内包する知性論は理性論に媒介され内包される。超越論的論理学は、分析論だけでは完結せずに、弁証論に継承され、理性推論に接合する。その理性推論は、経験的データを分析する知性を自己に媒介するかぎりで客観的妥当性を保持する。超越論的分析論における理性論を継承する論証である。<sup>31)</sup>しかし、理性推論が「超越論的主観Xの観念性」の枠を逸脱し恣意的な思弁に耽る場合は、超越論的弁証論=「仮象の論理学」に転落する。超越論的論理学は、「仮象の論理学」というネガティブな側面を自己に否定的に媒介することで、そのカテゴリーの「単一性・多数性・全体性」(B114)が担保されるのである。そのために、「仮象」語は、『純粹理性批判』の目次を除き、本文で最初のB20頁から最後のB882頁まで全巻を貫通して用いられている。

[関係の事物の属性への転化=仮象] カントは感性論で、仮象は主客の「関係」から発生する事象を「対象自体の属性」に帰すことから発生する、と記す。

「客体それ自体には全く見られないけれども、つねに客観と主観との関係に見られ、客観の表象と不可分なものが、現象である。したがって、時間・空間という述語が感覚の対象そのものに帰属されるのは正しい。その点では仮象は存在しない。それに対して、主観に対するこれらの対象の一定の関係を無視して、私の判断をその関係に制限しないで、私がバラ自体に赤を帰属し、土星(Saturn)には取手(Henkel)がついていると判断するなど、あらゆる外的な対象に広がりをしてそれ自体として帰属させれば、そこに直ちに仮象が発生するのである」(B69-70)。

或るバラが赤く、良い香りがするのは、そのバラを見る私の視覚や嗅覚が働いているからである。眼が見えなければ、物は見えない。感性がなければ対象は人間に現象しない。眼が見えても、地動

説を知り理解しなければ、天体の運動を天動説のように誤認する。日の出、日の入りを地球の自転によるのではなく、太陽の運動と誤認する。このことを念頭にカントは、(1) 認識可能性の条件と(2) 認識対象の可能性の条件とは、同じ条件の二面である (B197) という。(1) 認識できる能力があればこそ、(2) 認識主観に認識対象が現象するのである。

このことは社会的次元に拡張できる。或る著書(『資本論』)を執筆するさいに著者が参考にした主要文献(『純粹理性批判』)を読者が読んだことがなければ、読者には著書のその含意は分からない。さらに微妙な反転が生じる。或る絵に神が宿るかのように現象するのは、その絵に神が宿ると認める者にとってのみの現象である。或る紙幣が貨幣として通用するのは或る共同体内部においてである。マルクスはこのことを「差異論文」で指摘する。その同型性で「神=貨幣」なのである。<sup>32)</sup>

## [5-2] マルクスの仮象論

『資本論』の「仮象」語 『資本論』(第1部)を貫徹する哲学的な基本概念は「物象化(Versachlichung)」語ではなく、「仮象(Schein)」語である。「物象化」は『資本論』第1部でただ1回用いられているにすぎない(Dietz Verlag Berlin 1962, S.128)。「仮象(Schein)」は頻発する。第1部では全部で26回である。用語Scheinが出てくる頁を同じDietz版で示すとつぎのようになる。

88, 89, 95, 97 (2回), 98, 106, 107, 129, 264, 304 (2回), 325, 419, 422, 454, 465, 534, 555, 561, 572, 574, 582, 599, 609 (2回).<sup>33)</sup>

『資本論』のように「仮象(Schein)」語が全巻を通じて体系的に貫徹する著書は、『純粹理性批判』以外にあるだろうか。しかも『純粹理性批判(Kritik der reinen Vernunft)』の「批判(Kritik)」にならって、『資本論』の副題は「経済学に対する批判(Kritik der politischen Ökonomie)」である。両著には「要素=集合」・「事物への二重の観点」・「旋回する」・「要素分析」の共通点がある。この事実は『資本論』が『純粹理性批判』を主要な典拠にしたことを根拠づける文献史上の重要な事実である。この事実は『資本論』の体系を編成する原理は何かを解明するうえで、決定的である。<sup>34)</sup>

『仮象としての商品物神性』 『資本論』で「仮象」語が最初に続けて8回(88～98頁)使用されるのは「商品物神性論」(第1部第1章第4節)においてである。そこで全体の使用頻度の約3割弱は使用されている。この事実は、仮象の観点に立つ商品物神性論こそ、『資本論』を編成する重要なモメントであることを示唆する。マルクスはそこで、商品世界の人間の社会的性格が労働生産物そのものの対象的性格として鏡映させる事態を「入れ替わり(quidproquo)」といい、その「《入れ替わり》によって、労働生産物は商品に、すなわち感性的でありながら超感性的な物、または社会的な物になる」(S.86: 訳123)と指摘する。そのような事態を「対象的仮象(der gegenständliche Schein)」(S.88, 97: 訳126, 140)という。「感性的・かつ超感性的」、「対象的仮象(実在の対象に思弁的観念が現象する事態)」、これは明らかにカント『純粹理性批判』を念頭においた表現である。カントはそのような事態は、人間理性が陥ってはならない事態と批判的に限定したけれども、商品世界はまさにカントの批判する仮象が経験上の事実で充満する世界である。

『資本論』のその後に「仮象」が出てくる個所は商品物神性論の観点にむすびついている。例えば、Dietz版で561頁から582頁までに出てくる用語「仮象」は、「労働の価格」・「時間賃金」・「個数賃金」があたかも労働者が自分の価値生産物すべてを賃金として取得するかのような仮象、すな

わち、労働者が取得する賃金財（使用価値ターム）が価値生産物（V + M）の現象形態であるかのような仮象を解明する。<sup>35)</sup>

〔カノンのオルガノンへの転態〕 商品物神性論は最初の個所（第1章第4節）だけの問題ではない。「仮象」は、増殖する価値が姿態を重層的に変換して『資本論』を貫徹する現象である。マルクスは、近代資本主義は商品物神性が支配する事態であり、万物が転倒して天動説的に「仮象」として現象すると判断していたのである。第1部の最初からほぼ最後まで規則的に出てくるという意味で体系貫通的である。その意味で、つぎのカントの仮象論はマルクスの仮象論に近似的である。

「我々のすべての認識について甚だ空虚で貧しくとも、認識に知性の形式を与えるこのような見掛け（Schein = 仮象）の技術をもつことは、ひとを惑わせることがある。単に〔対象を〕判定するカノンにすぎないあの一般の論理学が、いわば実際に対象を生み出すオルガノンであるかのように、少なくとも客観的な主張をするまやかしとして用いられている。…このようにオルガノンと思い込まれた一般の論理学を弁証論（Dialektik）という。…オルガノンとみなされた一般の論理学は、つねに仮象の論理学で（Logik des Scheins）あり、弁証的（dialektisch）である」（B84-85）。

マルクスが『資本論』などで「弁証（法的）（dialektisch）」というとき、そこには第一義的に、カントの仮象論を批判的に継承するとの意味があり、「二枚舌（double tongue）」というニュアンスがある。『資本論』は、価値が使用価値を支配し、貨幣が商品を支配し、資本が労働生産物を生産するオルガノン（機関）を偽装する仮象を暴露する。マルクスの仮象批判はカントの「仮象の論理学」とは異なる。カントはつぎのように指摘する。

「純粋な総合判断は、単に間接的にせよ可能的経験に関係するし、あるいはこの経験を可能にすることそのものに関係する。また、純粋な総合判断の客観的妥当性は、経験を可能にすることのみに基づくのである」（B196）。

カントにとって純粋な総合判断の客観的妥当性の根拠は経験可能性にある。カントは経験的データぬきにカノン（論理学）がオルガノンであるかのようにふるまう事態を「仮象」と規定する。では、経験的データを整合的に論証し経験可能性をもたらす総合判断は、つねに直接に真理を開示するであろうか。これこそが、マルクスの問いである。

マルクスの仮象批判の対象は、超経験的・形而上学的な価値が経験的・実在的な使用価値を重層的に媒態に現象する「対象的仮象」である。経済学批判は「価値の現象学」を根拠づける「仮象の論理学」として展開する。マルクスは、カントが真理を把握する認識装置である超越論的演繹でさえも、仮象に陥ることがあることを論証する。『資本論』は、分析的なカノンが総合判断形式でオルガノンに転化する事態を論証する。<sup>36)</sup> マルクスはカントの「批判」はまだ不徹底とみる。

## [6] カントのカテゴリーとマルクスのカテゴリー

### [6-1] カントのカテゴリー表

カントにとって、外部から感性が触発されて受容するのは多様な直観である。その直観とは何かを判断する基準がカテゴリーである。「要素 = 集合の関数」で体系的に編成されるカテゴリー群の



基礎は、カントが超越論的分析論のほぼ始めで提示する「カテゴリー表」(B106)の「1. 量、2. 質、3. 関係、4. 様相のカテゴリー」で、つぎのように示されている。

- |   |   |
|---|---|
| 1 量のカテゴリー<br>(単一性・多数性・全体性)                    |   |
| 2 質のカテゴリー<br>(実在性・否定性・制限性)                    | 3 関係のカテゴリー<br>(実体と偶有性の関係)<br>(因果性と依存性の関係)<br>(相互性の関係) |
| 4 様相のカテゴリー<br>可能性—不可能性<br>現実存在—非存在<br>必然性—偶然性 |   |

カントはこの表を「知性がアприオリに内部に含む総合のすべての根源的で純粹な概念の一覧表」という。この表は帰納法による単なる「寄せ集め (Aggregate)」ではなく、「(思惟する能力と同じ) 判断する能力から体系的に生み出されたものである」(B106)。このカテゴリー表は、真としての「条件の全体性」をなす。カントはカテゴリーが対象を認識するさいに決定的な根拠となることをつぎのように説明する。

「アприオリな概念としてのカテゴリーの客観的妥当性は、カテゴリーによってのみ経験が可能であるということに基づく。なぜならばその場合、カテゴリーは必然的でアприオリに経験の対象に関係するからである。というのは、カテゴリーを媒介にしてのみ、そもそも経験の何らかの対象が考えられるからである」(B126)。

人間は《感覚が受容したことが何であるか》をカテゴリーでのみ判断する。カテゴリーこそ、外的感覚が受容した対象を経験として思惟可能なものに変換する根拠である。経験認識の可能性の条件はカテゴリーである。カテゴリーをもてばこそ、認識対象は現象してくる。夜間中学で文字を覚え、天体のことを学んだ者には、夜空の星々が以前より美しく見えてくる、といわれる。彼らはカントが説く真理を経験しているのである。

## [6-2] カントのカテゴリー表とマルクスの価値形態論

マルクスは価値形態論の直後の「第4節 商品の物神的性格とその秘密」で、経済学のカテゴリーの基本性格をつぎのように指摘する。

「商品世界のまさにその完成形態 — 貨幣形態 — こそが、私的諸労働の社会的性格、それゆえまた私的労働者たちの社会的諸関係を打ち明ける代わりに、物象的に覆い隠すのである。……この種の諸形態こそが、まさにブルジョア経済学の諸カテゴリーを作り出している」(S.90: 訳129、訳文変更)。

カントにとって、カテゴリーは経験に可能的に潜在する真理が分析できるメスである。理性の恣意に従い、知性がカテゴリーを経験分析の対象にしないで、思弁に走るとき虚偽に陥り、超越論的

論理学は「仮象の論理学」となる。マルクスにとっては、所与の経済学のカテゴリーは、真偽が反転した事態をそのまま永遠の自然的な秩序として無批判に表現する「仮象の論理学」を編成するものである。経済学のカテゴリーの批判的検討によって初めて、認識対象である近代資本主義が見えてくる。『哲学の貧困』（1847年）のころのマルクスがカテゴリーを論じた意味はここにある。

〔使用価値の捨象＝価値の抽象と《質のカテゴリー》〕 カントの観点から「要素＝集合の関数」に有機的に編成されているカテゴリー群は、つぎのように『資本論』に再編され継承される。冒頭商品の第1節では、商品の二要因（使用価値と価値）からなると分析される。価値は価値実体（Wertschubstanz）と価値の大きさ＝量（Wertgröße）から考察される。商品は使用価値と交換価値の二要因に分析される。交換価値は相異なる実在的な使用価値の交換比率である。相異なる使用価値は或る共通なもの（価値）に通約される。価値は或る単位で尺度される。この一連の行為は「相互に相異なる使用価値の実在性の捨象（Abstraktion）＝否定」である。<sup>37）</sup> その捨象を媒介にして価値は抽象される。価値はこのような条件のもとに制限されている（begrenzt, limited）。以上の分析は、カントのカテゴリー表の「3. 質のカテゴリー」の〔実在性（Realität）・否定性（Negation）・制限性（Limitation）〕の援用である。すなわち、

使用価値（実在性）の捨象（否定性）＝価値の抽象（制限性）

価値は他の存在とは無関係に独自に存在するのではない。商品所有者の「使用価値の実在性を捨象＝否定する無意識の行為」によってのみ、価値は、カントの「カテゴリー表」の「3. 質のカテゴリー」に対応して開示される。価値は、経験可能態である使用価値の背後に潜在し、使用価値に仮象する形而上学的存在である。

〔価値形態のカテゴリー〕 このような制限を受ける価値は、手にとって見たり触ったりできる物的な対象ではなく、思惟された存在、抽象的な存在である。抽象的な存在であればこそ、価値は具体的な自己表現形態をもとめる。それはまず、或る商品の価値が他の単一の商品の使用価値で表現する価値形態の第一形態となる。価値形態の第一形態はカントの「1. 量（Quantität）のカテゴリー」の最初の「単一性（Einheit）」に対応する。価値は抽象的な存在であるから、逆に自己制限を超越し、自己表現の媒態を無制限の無限の系列にもとめる第二形態に移行する。第二形態は多数の等価形態からなる価値形態である。第二形態はカントの「1. 量のカテゴリー」の「多数性（Vielheit）」に対応する。

第二形態は等価形態が収束せず無限に外延する系列である。したがって、第二形態は自己完結する価値形態、すなわち第三形態に移行する極限形態である。第三形態は、先にカントの論理学の体系編成のところでみたように、「条件づけられたもの」という諸要素の集合であるために、「条件の全体性」に再帰した形態である。第三形態は「1. 量のカテゴリー」の最後の「全体性（Allheit）」に対応する。こうして、価値形態はカントの「カテゴリー表」の「1. 量のカテゴリー」の構成要素の順序にそれぞれ対応する。

価値形態論はさらに、カントの「カテゴリー表」の「3. 関係（Relation）のカテゴリー」に対応する。第一形態は、或る商品の価値の「実体」がたまたま或る他の単一の商品の使用価値に現象する形態であるにすぎないから、「偶有性」という特性をもつ〔偶有性（Inhärenz）と実体（Substanz）〕。

第二形態は、或る商品の価値がその他のすべての商品種類の使用価値で表現される形態であるから、価値表現の原因である相対的価値形態とその価値表現が依存する等価形態との関係である [因果性 (Kausalität) と依存性 (Dependenz)]。第三形態は、第二形態では受動的な等価形態であった諸商品が自己の価値を単一の商品の使用価値で表現する能動的な主体に転化した形態であり、かつ第二形態では価値表現の主体・相対的価値形態であった商品がその他の価値表現の媒態・等価形態に転化する形態であるから、「相互性の関係 (Gemeinschaft) [能動と受動の相互作用 (Wechselwirkung zwischen dem Handelnden und Leidenden)]」に対応する。こうして、価値形態の三つの形態は「関係のカテゴリー」の三つの関係に対応する。

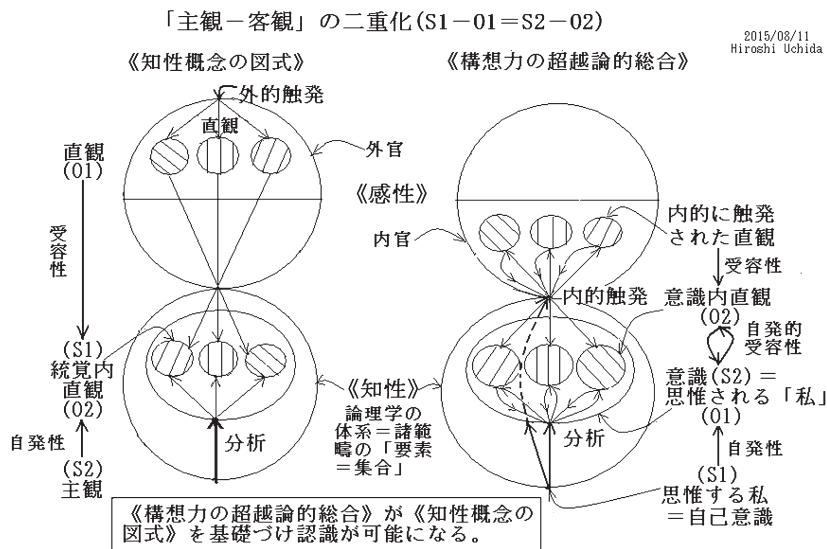
価値形態論は「4. 様相のカテゴリー」の「可能性・現実存在・必然性」にも対応する。第一形態は単一の等価形態で価値を表現するから、価値表現の単なる「可能性 (Möglichkeit)」を示唆するにすぎない。第二形態はその可能性が、相対的価値形態の商品以外の商品すべてに具体化した形態であり、価値表現は「現実存在 (Dasein)」になっている。さらに、第三形態は上でみたように自己完結する形態であるから、偶然性を排除した「必然性 (Notwendigkeit)」を具現する形態である。

## [7] 《思惟する私の二重化》と価値形態

### [7-1] カントの《思惟する私の二重化》

マルクスのカントとの関連はさらに重層化する。『資本論』の核心的基礎である価値形態論・商品物神性論・交換過程論は、カントのカテゴリー論だけでなく、「思惟主観の二重化・理性推論・誤謬推論 (仮象)」などの論理学を批判的に継承している。この継承関係を「思惟主観の二重化」からみよう。これはマルクスの価値論の基礎となる現象学を胚胎する。

[構想力・直観・カテゴリー] 超越論的分析論でカテゴリーが感性的経験に適応される様式は、知性自体の内部で形式的に再現される。知性はその内的感覚を触発して表象を発生させる。その表



象を意識が統一する。その統一された表象をカテゴリーが分析する。そのとき、「対象が直観において現存しなくても、対象を思いうかべる能力」(B151) = 構想力 (Einbildungskraft) が発動する。構想力は「対応する直観を知性概念に与える唯一の主観的条件として、感性に属する」(同) と同時に、「カテゴリーに即した構想力による直観の総合は、構想力の超越論的総合でなければならない」(B152)。現象とカテゴリーを媒介する時間のように (B177-178)、構想力も感性と知性を媒介する。

超越論的感性論では、感性が外部から触発され直観が発生すると想定される。外的な経験を一切捨象した超越論的分析論では、知性はつぎのように作用する。

「知性は構想力の超越論的総合の名の下に受動的主体に働きかける。その能力が内的感覚である。……その働きによって、内的感覚は触発される。……内的感覚は直観の単なる形式であるが、直観における多様なものの結合を欠いている。したがって、まだ一定の直観を含んでいない。この一定の直観は、私が形象的総合とよんだ構想力の超越論的作用による、多様なものを規定する意識によってのみ可能である」(B153)。

意識は、自ら内的感覚を触発し、かつ構想力を媒介に一定の多様な直観を発生させる。内的な多様な直観は「一つの自己意識」(B132)・「一つの意識」(B133) に統一される。ここではカントはまだ自己意識と意識を弁別していない。この「経験一般の可能性条件、かつ経験の対象の可能性の条件」(B197) に、外的感覚が触発され受容した多様な経験的直観がカテゴリーで分析され、経験の「客観的妥当性」(B126)・「客観的実在性」(B195) を獲得する。経験的直観は経験的認識(経験)になる。こうして、「意識による内的感覚の触発と構想力の作用→多様な直観の発生→意識内の多様な直観の統一→経験可能性の条件=経験の対象を可能にする条件→カテゴリーによる分析」という関連ができる(65頁の図「主観-客観」の二重化)を参照)。

上の引用文の少し先で、カントはつぎのように自問する。「自己意識」と「意識」を分離する可能性を孕む問いである。

「しかし思惟する私 (das Ich, der ich denke) が自己自身を直観する私 (das Ich, das sich selbst anschaut) とは、どのように (wie) 異なるのであろうか (というのは、私は少なくとも可能な限り他の直観の仕方を表象することができるからである)。しかも同じ主観として後者 [自己自身を直観する私] とは、どのようにして同じであるのであろうか。したがって、どのように私は、英知体および思惟する主観として、1つの思惟された客観としての私自身を認識するといえるのであろうか」(B155)。<sup>38)</sup>

カントは「知性(主観)と外的感覚(客観)」の関係に対応する関係を「知性(主観)と内的感覚(客観)」に展開する。「思惟する私」としての意識は、内的感覚を触発する「能動的な主観」である。と同時に、思惟する私自身は、意識に統一された多様な直観として、カテゴリーで分析される「受動的な主観」でもある。「思惟する私 (S<sub>1</sub>)」は、「思惟する私 (S<sub>1</sub>)」と「思惟される私 (O<sub>1</sub>)」に二重化する。ここでもカントは事態を二重に要素分析する。「直観する私 (主観 S<sub>2</sub>)」は「思惟される私 (客観 O<sub>1</sub>)」の行為であるから、「思惟される私 (O<sub>1</sub>)」は「直観する私 (主観 S<sub>2</sub>)」に巡回する (sich drehen)。「直観する私 (主観 S<sub>2</sub>)」は「(構想力の超越論的総合で結合された) 多様な直観 (客観 O<sub>2</sub>)」を対象とする。「自己意識-意識-対象」は外接する「三項図式」ではなく、「要素と集合が相互に射影しあう関数」である。それは65頁の図《「主観-客観」の二重化》の右

側のようになる。つまり、こうである。

$$S_1 - O_1 = S_2 - O_2$$

これまでのカントの論述で不分明であった「自己意識」と「意識」はつぎのように区分され、かつ関連づけられる。「思惟する私」は「自己意識」に対応し、「思惟される私」は自己意識の対象としての「意識」に対応する。自己意識 ( $S_1$ ) は自己意識 ( $S_1$ ) と意識 ( $O_1$ ) に二重化する。自己意識 ( $S_1$ ) は意識としての自己 ( $O_1$ ) を客観の対象として意識する ( $S_1 - O_1$ )。意識 ( $O_1$ ) は自ら直観する主観 ( $S_2$ ) に旋回し、一定の多様な直観を「1つの選言肢の集合 (einer Aggregat der Glieder der Einteilung)」(B380)、すなわち ( $O_2$ ) として統一し直観する。ここで注目すべき点は、客観が主観に旋回すること ( $O_1=S_2$ ) である。意識は自己意識の対象 ( $O_1$ ) であり、かつ多様な直観に相対する主観 ( $S_2$ ) でもある二重の存在である。見られる客観 ( $O_1$ ) は見る主観 ( $S_1$ ) に旋回する可能態である。

「主客反転 ( $O_1=S_1$ )」は、さらに二重の関連 [ $S_1 - O_1 = S_2 - O_2$ ] にも発生する。その論理的に可能な形式のなかで、行論上有意義なのは、上記の関連を逆転した関連である。すなわち、

$$O_2 - S_2 = O_1 - S_1$$

この形式は、最初の形式で「意識」の「対象」であった「多様な意識」( $O_2$ ) が主観に転化=自立し、「意識」( $S_2$ ) と「自己意識の対象」( $O_1$ ) の区分を「意識一般」に統一し、「意識一般」という媒態に自己を「選言肢の集合」として射影する形式である。それは、最初の形式の「逆の関連 (Rückbeziehung)」である。こうして、つぎのような連結するつぎの関連が生成する。

$$S_1 \rightarrow O_1 = S_2 \rightarrow O_2$$

$$S_2(O_2) \rightarrow O_2(S_2) = S_1(O_1) \rightarrow O_1(S_1)$$

主観は二重化して、主観とその対象=客観となる。客観はさらに反転し主観になり、その対象=客観に相対する。すなわち、

[自己意識] - [意識] - [対象]

$$(S_1 \longrightarrow O_1 = S_2 \longrightarrow O_2)$$

という関係になる。この関係はつぎの関係に反転する。

[対象の主観(主体)化] - [意識一般] - [意識一般への対象の包摂]

$$[S_2(O_2) \rightarrow O_2(S_2) = S_1(O_1) \rightarrow O_1(S_1)]$$

カントの場合、或る存在は多面的存在に転化しうる二面的存在である。カントは、同じ対象を単に経験的側面から観察するだけでなく、それとは隔絶した超感覚的・形而上学的な側面からも考察し、経験的データに潜在する真理が自己を開示する理路を開く。その二面的考察の方法は二面を相互に媒介しあうように編成する。その方法は、直観に現象する経験的な「主観-客観 ( $S_1 - O_1$ )」を超える観点 ( $S_2 - O_2$ ) から考察する「複眼 ( $S_1 - O_1 = S_2 - O_2$ )」である。カントの対象への「要素=集合の関数」は、或る対象が受動的客観であり、かつ自発的な主観でもある複眼を開示する。

## [7-2] 《自己意識-意識-対象》と価値形態

《自己意識-意識-対象》の図式は、マルクスの価値形態論に継承される。つぎにこの関連を確認する。

[自己意識]-[意識]-[対象]

$$(S_1 \rightarrow O_1 = S_2 \rightarrow O_2)$$

の  $(S_2 - O_2)$  は、価値形態論の第一形態および第二形態に、それぞれ対応する。上記の関連とは「逆の関連」、すなわち

[対象の主観(主体)化]-[意識一般]-[意識一般への対象の包摂]

$$[S_2(O_2) \rightarrow O_2(S_2) = S_1(O_1) \rightarrow O_1(S_1)]$$

は、第三形態に対応する。この対応関係を図解したものが68頁の図「《自己意識-意識-対象》と価値形態」である。

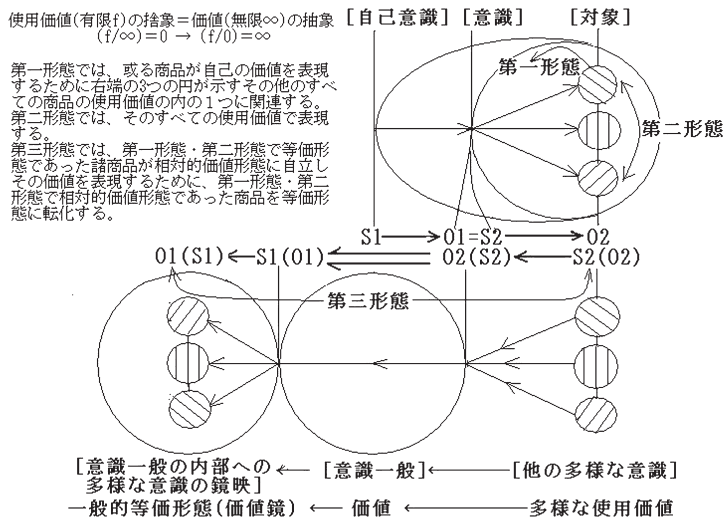
この3つの対応関係をつぎにより詳しくみよう。価値形態の第一形態は、相対的価値形態の商品の価値を単一の等価形態の商品の使用価値で表現する関係である。注意すべきことに、価値形態論の価値は本性上、理論的な存在である。「構想力の超越論的総合」における価値である。その価値は、意識の外部に実在する客観的な物ではなく、主観に表象に思いうかべられた超越論的存在であり、同じく表象に思いうかべられた経験的な使用価値は主観内の客観である。第一形態は、「意識」の1つの「対象」への関係  $\langle S_2 - O_2 \rangle$  に対応する(別掲図「自己意識-意識-対象」における  $S_2 =$  価値から  $O_2 =$  使用価値の1種類[右上の3つの小円の最上の円]への関連)。

第二形態は、第一形態の価値がそれ自身以外のすべての商品の使用価値(図では右上の3つの小円)で表現する  $(S_2 - O_2)$ 。この形態をカントの「構想力の超越論的総合」でみれば、意識  $(O_1)$  が自己意識  $(S_1)$  の対象である関係  $(S_1 - O_1)$  から自立し、構想力の超越論的総合で結合された多様な表象  $(O_2)$  を直観する主観  $(S_2)$  に反転する関係  $(O_1 = S_2 - O_2)$  に相当する。

第三形態では、第二形態で価値表現の媒態=客観となってきた多様な特殊な諸商品  $(O_2)$  も、商品としてはこれまで価値の表現主体であった相対的価値形態の商品と同格である。その諸商品が述語から主語に反転・自立し、それ自身の価値を表現する事態である。この客観から主観への反転は、カントの場合の「自己意識」と「意識」が「意識一般」に統一し、「意識一般」(図の中央の大円)

《[自己意識-意識-対象]と価値形態》

2015/12/03  
Hiroshi Uchida



に多様な対象としての自己を鏡映する関係に相当する  $[S_2(O_2) \rightarrow O_2(S_2) = S_1(O_1) \rightarrow O_1(S_1)]$  (図では左側の3つの小円を内部に含む大円)。その自立に対応して、第二形態で相対的価値形態であった単一の商品 ( $S_1$ ) が価値表現の唯一の媒態になる  $[O_1(S_1)]$ 。第二形態の「主」(相対的価値形態)「客」(等価形態)を反転したものが第三形態である。

以上要するに、「自己意識」の意識対象である「意識」自身が1つの「対象(他の意識)」を表象する事態 ( $S_2 \rightarrow O_2$  [1] 第一形態)から、「意識」が他の多様な対象(意識)を意識する事態 ( $S_2 \rightarrow O_2$  [2] 第二形態)へと進む。ついで、「意識」に統一された他の多様な「意識」は、意識の対象である事態から自立して、自己を「意識一般」を媒態にして「多様な諸意識の集合」、すなわち、カントのいう「選言肢の集合」(B380)に射影する  $[S_2(O_2) \rightarrow O_2(S_2) = S_1(O_1) \rightarrow O_1(S_1)]$ 。この関連は、マルクスが第二形態論の最後でいう「この系列(第二形態)に事実上含まれている逆の関連(Rückbeziehung)」(MEW, Bd.23, S.79)と論理的に同型である。<sup>39)</sup> マルクスの価値形態論をカントの理性推論でみれば、第一形態は「前三段論法(prosyllogismos)」(B387-388)の「大前提-小前提-結論」の理性推論に対応する。その結論がつぎの前三段論法の大前提になる。これが第二形態である。第三形態は、第一形態と第二形態の関連の「逆の関連」である。<sup>40)</sup> 第三形態は「後三段論法(episyllogismos)」(B388)の理性推論に対応する。

以上の推論から、第一批判の内部に超越論的主観Xという単数主観に対応する複数の主観が生成する可能性が潜在することが判明する。その諸主観は超越論的主観の内部に統一された共同行為をなす諸主観である(wir als das Ich)。<sup>41)</sup>

## [8] カント＝マルクスの理論と実践の区別と関連

### [8-1] カントの理性の理論的使用と実践的使用

上記のカントの「自己意識-意識-対象」はあくまで理論的な規定である。それは理論的・抽象的な規定であり、現実的には接近できない。カントは理論的可能性と実践的実現を区別する。

「思索における理性の[理論的な]使用が本来意図しているのは、具体的に一致するものが与えられることであるけれども、或る概念にどれほど接近しようとしても、その概念には絶対に到達することはできない。……実践理性の理念は、つねに現実的に与えられる。……したがって、実践的な理念はいつでもきわめて実り豊かなものであり、実際に行為するさいにも必然的なものになることは避けられない。しかも[理論的な]純粋な理性は、この実践的な理念のうちで純粋な理性の概念に含まれていたものを現実にも生み出す因果関係を含んでいる」(B384-385、ボールド体は引用者)。

「理論的な理性の使用」と「実践的な理性の使用」とは区別しなければならないと同時に関連づけなければならない。理論は抽象的であればこそ、具体例は数多ありうる。しかし抽象態である理論そのものは具体的には表現できない。それは理論的な規定・「或る極大なもの」である。実践的な理性の使用では、課題の解決の条件も目的も具体的・現実的に前提される。その行為がもたらす結果も具体的・現実的である。では、実践的目的の実現は何を根拠にしているのか。それは何の根拠もないのか。ないとすると、その実現は偶然にすぎなくなる。理論的な理性の使用こそが、実践

的な理性の使用の理論的経路を開示する。その意味で両者は媒介しあうのである。<sup>42)</sup>

## [8-2] 理論的な価値形態と実践的な交換過程

マルクスはすでに『経済学批判』で、まだ価値と交換価値の概念的区別をしないで、(交換)価値は「単に理論上のものとしてのみ考察された (nur eine theoretisch gedachte)」関連であり、それが実現するのはただ交換過程のうちにおいてだけであると指摘し、『純粹理性批判』第2版序文への関連を示唆している (MEW, Bd.13, S.29)。「カントの理論と実践の区別と関連」のマルクスによる援用は、『資本論』の価値形態論と交換過程論で明確である。価値形態論は価値の使用価値による理論的観念的な表現を論証する。その表現は商品の魂 (Warenseele) が一人密やかに自問自答する思弁である。価値形態論における第二形態から第三形態への移行も、理論的に極限的な可能性を指摘するにとどまる。これに対して、交換過程論では、商品所有者 (Warenbesitzer) という人格 (Person) が登場する。<sup>43)</sup> 彼らは所持する商品の「価値の実現」と「使用価値の実現」を同時に同格に求めて実践的に競い合う。価値形態では、価値という魂 (Seele) が主体であり、使用価値は価値の表現媒態になる従属的な関係である。これに対して交換過程では、使用価値そのものが人格の欲望の対象になる場面 = 市場における問題が主題である。

それでは、その同時実現は如何にして達成されるのか。マルクスは、『始めに行為ありき。商品所有者たちは、考えるまえに行動したのである』と書いて韜晦する。《理論的と実践的の区別と関連づけ》を明確に行ったカントの『純粹理性批判』をマルクスが価値論の「価値形態論と交換過程論の関連」に援用していることを知らない『資本論』の読者は、ここで困惑する。マルクスはカントにならって、価値と使用価値の同時実現の理論的に可能な経路は価値形態論で解明したのに、マルクスはその論証を交換過程論で明確に指示しない。しかし、我々はカントからマルクスのこの継承関係を知ったのであるから、価値形態論と交換過程論の区別と関連を明確に理解できる。

〔 $(1/n) \times n = 1$ の可能性〕 価値形態の第二形態では、商品世界に参加している諸商品の数 (n) だけ、第二形態は存在しうる。それぞれの商品の第二形態は、(n-1) の数の商品を等価形態とする第二形態が n 個存在する。各々の商品は理論的に同格である。それぞれの商品が一般的等価形態になる可能性は  $(1/n)$  である。商品世界全体では、その可能性は  $(1/n) \times n = 1$  である。この1は必然性に他ならない。つまり商品世界は必ず一般的等価形態を生成する。この絶対的可能性 = 必然性が実践的に実現する場合こそ、商品の交換過程にほかならない。

このように、価値形態論は交換過程から一般的等価形態 = 貨幣が生成する実践的経路の理論的根拠を賦与する。その賦与をていねいにマルクスは説明しないで、ただ、『始めに行為ありき』と韜晦し、貨幣生成の理解を困難にしたのである。マルクスはエンゲルスやラサールなどへの書簡で、自分は研究したこと記述するときに「圧縮すること (kondenzieren)」・「隠蔽すること (verstecken)」を旨とすると述懐した (MEW, Bd.29, S.551; Bd.30, S.207)。やたら「科学的社会主義」を標榜する非科学的なブルドンたちとの論戦で罨にかけるために、である。

かつておこなわれた価値形態論と交換過程論をめぐる論争は、マルクスがカントの理性の理論的使用と実践的使用の区別 = 関連づけを継承し、価値の理論的表現過程と、価値および使用価値の同時実現という実践的過程を区別し関連づけたことにまったく気づかずに展開された誤謬問題である。



[マルクスとカントの重層的な対応諸関係] 本文番号 [2] 「要素 = 集合」は『資本論』第1部第1章第1節の冒頭商品に対応する。本文番号 [3] の「同一対象への複眼と観点の巡回」は同第2節冒頭文節に対応する。本文番号 [5] の「仮象」は同4節の商品物神性論に対応する。本文番号 [6] の「カテゴリー」および [7] の「思惟する私の二重化」は同第3節の価値形態論に対応する。[8] の「理論と実践」は同第3節の価値形態論および第2章の交換過程論に対応する。筆者が挙げた「マルクスとカント」のこのような6つの対応関係は『資本論』の基礎理論（第1章および第2章）で一貫して連結する。

## [9] カントの理性推論とマルクスの価値論

### [9-1] カントの理性推論

[理性推論とは] このようにマルクスの価値形態論に援用されるカントの論理学は「理性推論 (Vernunftschluß)」(B357) である。そこで、カントの理性推論をより詳しくみよう。カントは理性推論をつぎのように規定する。

「理性を、認識するための特定の論理的な形式の能力とみなすならば、これは推論する能力である。理性は間接的に判断する能力である。すなわち或る〈可能的な判断〉の条件 [小前提] を、〈与えられた判断〉 [大前提・一般的な規則] の条件のもとに包摂することによって、判断する能力である。……規則は、特定の条件のもとで何らかの一般的なこと (etwas allgemein) を主張する。しかも規則の条件は、そこで示された事例に妥当する。したがって、この条件のもとで一般的に妥当するものは、(この条件に伴っているものとして) そこで示された事例についても妥当すると見なされる」(B386-387)。

上の引用文は自然言語の文法の例で理解できる。自然言語の文法は、その言語の豊富な個別的使用例が名詞・動詞・形容詞・副詞・助詞・前置詞などの品詞に区分され、その区分に貫徹する一定の規則として導き出される。翻ってその規則 = 文法は、その自然言語の個別的な使用法を指示する。特殊なものから、それを編成する一般的規則が導き出されたのであるから、その規則はその特殊なもの範囲内で一般的妥当性をもつ。<sup>44)</sup>

カントのいう知性は、一定の「規則」に現象 (経験) を統一する能力であり、理性は知性を背後から一定の「原理」に統一する能力である。理性は、知性が経験から分析する諸規則を一般的な原理に統一する (B359)。これがカントのいう理性推論である。その原理を導き出す前提諸条件となった個々の事例はその原理に妥当する。カントの経験論批判の論拠はこの理性推論にある。カントがあげる三段論法の例 (B378) を援用すれば、

大前提 (1) 「すべての人間は死すべき存在である」

小前提 (1) 「カイウスは人間である」

結 論 (1) 「したがって、カイウスは死すべき存在である」

において、大前提の主語「すべての人間」は完全な外延量をもつ一般性である。カイウスを含む個々の人間は、この一般的な集合に包摂される諸要素である。「超越論的理性の概念は、或る与えられた条件づけられた存在 (大前提) に対する諸条件の総体性 [個々の人間のすべて] という概念

以外の何ものでもない」(B379)。

〔究極まで連鎖する三段論法〕 カントの理性推論は1回の論証で閉じない。究極の結論まで推論を徹底する。そこで、個人カイウスの三段論法の例(1)に連続する、つぎのような2つの三段論法を考えてみる。

大前提(2)「肺結核は不治の病である」

小前提(2)「カイウスは肺結核を患っている」

結論(2)「カイウスの肺結核は治らない」

つぎの三段論法でカイウス個人は終局を迎える。

大前提(3)「肺結核患者の肺炎は死に至る」

小前提(3)「肺結核患者カイウスは肺炎を患った」

結論(3)「カイウスは死に至る」

上記の3つの三段論法の連鎖か、それとは異なる三段論法の経路は、カイウス以外のすべての個々の人間にも適応できる。経路の異同にかかわらず、何れの人間も死に至る。個々人の死に至る経路の総集合が「死すべき人間のすべて」を包含する集合である。その総集合は、一般化すれば、カントのいう「条件の総体性(全体性)」(B379) = 「無条件なもの」(B364)である。<sup>45)</sup>

〔理性推論の3つの類(クラス)〕 カントの理性推論は「あらゆる経験の全体における知性の使用を原理で規定するものとなる」(B378)。しかしその中には「経験的な前提をまったく含まない理性推論がある」(B397)。すなわち「弁証論的推論」(同)である。カントによれば、弁証論的推論には3つある。

第1類の理性推論は、「私は、いかなる多様なものも含まない主観という超越論的概念から出発して、この主観そのものは絶対的に統一されたものであることを推論する。しかし、私はこうした仕方ではそのような主観についてのいかなる概念も全くもっていない」(B397-398)というものである。カントはこれを「超越論的な誤謬推論(Paralogismus)」とよぶ。

第2類の理性推論は、「或る与えられた現象一般の諸条件の系列(Reihe)の絶対的な総体性という超越論的概念に到達しようとするものである」(B398)。この系列は自己矛盾する概念の系列が存在するから、それとは対立する正しい統一を推論するけれども、その統一についていかなる概念ももつことはできない。カントはこの理性推論を「純粹理性のアンチノミー(Antinomie)」という。

第3類の理性推論はこうである。「わたしに与えられることのできる諸対象一般を考えるための諸条件の総体性から、諸物一般を可能にするためのすべての条件は、絶対的かつ総合的に統一されていることを推論する。すなわち、その単なる超越論的概念からは私が知り得ない諸物から出発して、すべての存在者のうちの存在者[神]が存在すると推論する」(B398)。しかし私はこの存在者からは、さらに展開されたことは何も知ることはできないし、それについての如何なる概念もつくることはできない。カントはこの理性推論を「純粹理性の理想(Ideal)」という。カントは『純粹理性批判』では神の存在証明はできないことを論証したのである。プロテスタント的論証である。旧宗教権力にとっては「看過できない論証」である。

## [9-2] カント理性推論からマルクス価値理論へ

この3つの理性推論はマルクスの価値論に継承される。

第1の誤謬推論の「いかなる多様なものも含まない主観の超越論的概念」が『資本論』で対応するものは、具体的な使用価値を捨象すること（Abstraktion）から生成する「価値」概念である（S.52：訳64）。価値は感性的経験を超越した「観念的な存在」である。価値が単なる財を商品に転化し、「多様なもの〔富〕すべてを絶対的に統一する事態」である。それはすべての富（使用価値）が価値の素材的担い手になっている事態である。そこでは価値という「観念性」が使用価値という「実在性」に憑依する。これが満面開花した商品世界・近代資本主義である。<sup>46)</sup> 観念性が実在性に転態する事態は、カントにとってデカルトの命題「私は思惟するがゆえに私は実在する（das cogito, ergo sum）」（A370）という「欺瞞的仮象（trügliche Scheine）」（A369）に端的に表現されている。しかしマルクスにとっては、その誤謬推論は近代資本主義で成立する事態と同型である。「超越論的主観X」は観念性にとどまることなく、実在態に転化している。「思惟する主観（cogito）」が「実在する主体（sum）」に転化するの「ゆえに（ergo）」という「媒辞概念の誤謬（sophisma figurae dictionis）」（A402：B411）による。単なる財（使用価値）を使用価値と価値の統一態（商品）に転化する媒辞概念は、その財の私的所有者の無意識の「使用価値捨象（＝価値抽象）」である。即ち、[使用価値（有限態f）／無限（∞）] = 0、[使用価値（有限態f）／0 = 無限（∞）]。

カントがいかなる概念ももたないと批判する「誤謬推論」は、商品世界では実在する現実的概念である。商品世界における観念性が実在態に転化する最も基本的な事態は、或る商品の価値が他の1つの商品の使用価値で表現される価値形態の第一形態である。

第1の弁証論的推論は第2類の推論に連結する。ライプニッツの「モナド」は第二の理性推論の適例である。モナドは無限の特殊からなる系列＝無限集合である。しかし「全て特殊を枚挙した後になお別の特殊が存在する」という判断は背理である。全ての特殊（使用価値）の無限集合は外部に特殊の否定＝一般（価値）を措定する。これは第一形態・第二形態の前提である。初版価値形態論の第四形態は、【**相対的価値形態が自己を等価形態に要素として含まない第二形態（無限集合）を要素として含む無限集合**】である。**特殊**の無限集合（第四形態）は外部に必ず、或る**個別**商品を第三形態の「**一般的等価形態**」（**個別＝特殊・一般**）、即ち諸商品の「代表」に抽出する。

第2の理性推論は第3の理性推論で止揚される。第3の理性推論は、すでにみた「三段論法」を無限に連鎖させて収束する「究極のもの」・「不変なもの」である。商品の間のアンチノミーが結果的＝実践的にもたらすものは価値形態の第三形態の一般的等価形態＝「貨幣」である。貨幣があればこそ、商品は別の商品に姿態変換ができる。貨幣は商品世界の「神」である。「神＝貨幣」、これはマルクスの「学位論文」（1841年）以来の基本認識である。<sup>47)</sup> 貨幣の生成は、理論的な価値形態論と実践的な交換過程論で論証される。生成した貨幣は、近代的私的所有者たちの共同存在性を現実的に体現する「諸商品のなかの神」・「諸商品の天国的な存在」（MEGA,II/1.1,S.146）である。カントのいう「純粹理性の理想」は彼がいうように「なんの概念もつくりだすことができない存在」ではなくて、具体的な現実存在である。商品交換関係から生成した貨幣はさらに資本に転化し、資本が生んだ剰余価値はさらに資本に再転化し、商品世界を支配する。このようにカントの理性推論はマ

ルクスの価値論に批判的に継承されている。

以上のように、本稿では価値論を中心に、『純粹理性批判』の『資本論』への批判的継承関係を、[1] カテゴリー論・[2] 思惟する自我（自己意識—意識—対象）論・[3] 理性推論の順序で、三重に解明した。拙著『資本論のシンメトリー』で解明したように、三重に規定される価値論こそ、『資本論』の体系展開の基本視座を定礎するのである。

## [10] 要素変換に関して不変の構造

### [10-1] 『純粹理性批判』における「不変なもの」

〔究極の何ものか (etwas)〕すでにみたようにカントの理性推論は、究極の結論にまで至るまで連鎖する三段論法である。カントは超越論的論理学の特性の1つとして「一貫性」をあげる。その「一貫性」は究極に向かって貫徹する「徹底性の精神 (der Geist der Gründlichkeit)」(BXLII)に基礎づけられている。その精神で、超越論的論理学は諸要素として純粹知性諸概念（カテゴリー）を関数に集合する (Sammlung der Begriffe)。カントはこのことをつぎのように一般化する。

「理性推論とは、みずからの条件を、一般的な規則（大前提）の条件のもとに従わせる一つの判断にすぎない。しかも理性はこの〔一般的な規則の〕条件に対しても、まったく同じ手続きを適用しようとする。そこでこの手続きが続く限りで、(前三段論法によって)条件のそのまた条件がどこまでも求められることになる。したがって、(論理的な使用において)理性一般に固有な原則は、条件づきの知性の認識に無条件に妥当するものを見つめようとすることであり、この無条件的なものによって知性の統一が完結することが理解できる」(B364、( )は原文の挿入、[ ]は引用者の補足)。

では、無条件なものに到達するためには、どのような論理的過程が不可欠なのであろうか。それは「条件のそのまた条件」に遡及する過程はカテゴリーを適用する過程である。理性は、経験的な表象と結合する知性を媒介にして、無条件なものを探求している。究極の無条件なものとは、経験的な諸々の要素を枚挙し尽くした果てになお残る〈何か或るもの〉である。

「理性の概念が無条件的なものを含むときには、理性の概念が関与するのは、すべての経験が所属するものでありながら、しかも決して経験の対象とはなりえない〈何か或るもの etwas〉である。理性は経験から出発して理性推論においてこの〈何か或るもの〉に到達しようとするのである」(B367-368)。

〔要素変換に関して不変の構造〕カントの理性推論の究極は、一切の経験的な諸要素を枚挙し尽くしてなお存続する或る究極的なものである。「何か或るもの」は、一定の規則に即して変換される膨大な諸要素＝「選言肢の集合」を自己の内部に包含しつつ、それ自体は「不変の構造」である。この「要素変換に関して不変の構造」には数学でいう「デザルグの定理」が対応する。拙著『資本論のシンメトリー』でみたように、『資本論』にもこの「要素変換に関して不変の構造」が潜在し貫徹している。不変の構造は無限遠点 (infinite point) に根拠をもつ。『資本論』の価値概念も無限遠点に根拠をもつ。カントが『純粹理性批判』の理性推論で突き詰めた論理構造は、マルクスが『資本論』の独自の記述様式に潜在させた論理構造と同型である。それは経験的な諸要素の変換が

従い、自らは変化せず、むしろ経験的なものを一定の規則で配列する「究極そのもの」である。

カントは、『純粹理性批判』後半の超越論的弁証論で本格的に論述されるこの「何か或るもの」をすでに「第2版序文」で先取りし、この構造をつぎのように説明している。

「この不変なもの (dieses Beharrliche) は、私の中の直観ではありえない。なぜなら、私の中で見られ得る私の現実存在の決定根拠は、すべて表象であり、そのようなものとして、表象とは異なる不変なものを自ら必要とするからである。表象の移り変わり、したがって時間の中で表象は移り変わるが、その時間における私の現実存在〔諸要素の変換〕は、この不変なものとの関係で確かめられるのである」(BXXIX、原文全文ゲシュペルト)。

「この不変なもの」とは、「我々が認識のすべての素材を、しかも内的感覚の素材さえも得ている」「我々の外部に現存する物」(BXXXIX)である。いま、冒頭の問い「究極の何ものか」に答えられる論理段階に到達したのである。

〔カント論理学の編成原理〕 これまで、カントからマルクスに批判的に継承された諸契機として、「要素＝集合」・「同一対象の二側面からの考察」・「観点の旋回」・「要素分析編集法」・「カテゴリー」・「自己意識－意識－対象」・「仮象」などをあとづけてきた。これらを参考に以下では、「何か或るもの」とは何かを明らかにする。

カントは感覚的経験データを正確に理解できる基準として超経験的な論理学を構築した。その論理学の各々の概念は「要素」として「集合」に包摂され、その集合はより高次の集合に要素として包摂される。「一貫性」・「真理性」・「体系性」を顕現するカントの超越論的論理学は、「要素＝集合」の重層的な連鎖である。この双数的な要素分析法は認識主観「私」の二重化にも貫徹する。「思惟する私 $S_1$ 」は「私」自身を「思惟対象としての私 $O_1$ 」に客観化し、その「思惟対象＝客観としての私」は「直観する私」という主観に旋回する ( $O_1=S_2$ )。

理性推論では、対称的に反転する「要素＝集合」の論理が、大前提 (Obersatz:O)・小前提 (Untersatz:U)・結論 (Schlußsatz:S) の三段論法に発現する。

一方の前三段論法 (prosyllogismos) は、「推論を連結するものとして、条件づけるものの側における系列」(B388)である。いいかえれば、O (大前提) にU (小前提) が包摂されS (結論) が導き出される ( $O \rightarrow U \rightarrow S$ )。前三段論法は1回で収束するのではない。「条件のさらなる条件」をもとめて、究極まで推論は持続する。

$$(O_1 \rightarrow U_1 \rightarrow S_1 = O_2 \rightarrow U_2 \rightarrow S_2 = O_3 \rightarrow \dots)$$

したがって、

$$[(O_i \rightarrow U_i \rightarrow S_i) : i = 1, 2, 3, \dots \infty]$$

この論理形式  $[O_j U_j (O_i U_i \rightarrow S_j) S_j]$  は、すでにみた、《或る問いとその解はつぎの問いと解を生む》という論理形式  $[Q_j (Q_i A_i) A_j]$  と同型である。

他方、後三段論法 (episylogismos) は、「条件づけられたものの側における系列を遡及する系列」(B388)である。S (結論)  $\rightarrow$  U (小前提)  $\rightarrow$  O (大前提) という推論である。連結する理性推論では、結論はつぎの推論の大前提になる ( $S_1 \rightarrow U_1 \rightarrow O_1=S_2 \rightarrow U_2 \rightarrow O_2$ )。マルクスとの関係で注目すべきことに、カントは「前三段論法の連結あるいは系列は…上向する (aufsteigen) 系列である」(B388)といい、後三段論法は「下向する (absteigen) 系列」(同)であると規定している。

【自己意識の不変性】 人間が過去の或る場面を回顧するとき、回顧される場面（対象）のほかにその場面を見ている自分（意識）が存在する。その自分（意識）を現在の自分（自己意識）が観ている。<sup>48)</sup>これは、《自己意識（回顧する自分）→意識（回顧される自分）→対象（回顧される場面）》という関連である。「自己意識（SB 回顧する自分）」には「意識（B 回顧される自分）」が包摂され、その包摂される意識のなかに「対象（G 回顧される場面）」が包摂されるという三重構造《SB [B (G)]》をなす。「自己意識」は常に主観的な《現在（永遠の今）》に存在し、「意識」は「意識される対象」に即して《過去－現在－未来の時間軸》を自在に往還する。対象は必ずしも実在した物とは限らない。人間の構想力の働きで生まれるイメージである。眼差しを送る「時」が「現在」の場合、「対象を見ている意識」と「その意識を見ている自己意識」が同じ「現在」に帰属するので、[対象を見ている《意識》を見ている自己意識]という二重構造が未分化になり、その二重化は自覚されにくい。カントは「不変なもの」を「或る思惟の超越論的主観X」（B404）とも表現した。

『純粹理性批判』の対称的な要素分析編成法《I 原理論 [1感性論→2論理学（1分析論→2弁証論）] →II 方法論》は、ロシアの人形マトリーシュカがそれぞれの内部に同型のより小さな人形を含んでいるように、I 原理論Gが「1感性論Sおよび2論理学L」からなり、後者の2論理学が「1分析論Aおよび2弁証論D」からなる《G[S+L(A+D)]》。『純粹理性批判』のこのような三重の対称的構造は、その具体的な要素が変換しても、構造自体は変わることがない。そこで展開される「自己意識－意識－対象」《SB[B(G)]》の関連にも再現される「同型の不変なもの」である。

【真偽二重の可能態としての不変なもの】 しかしカントは、理性推論の徹底が浮かび上がらせるこの《無条件なもの》を無条件に真理とは判断しない。それが真理か虚偽か、弁別しなければならない、という。

「この概念が客観的な妥当性をもつ場合には、それは〈正しく推論された概念〉と名づけることができる。あるいはこの概念が客観的な妥当性をそなえていない場合には、〈推論の見掛け（Schein 仮象）〉を装って入り込んできた概念であるから、それは〈詭弁的な概念（vernünfteln-de Begriffe）〉とよぶことができる。」（B368）。

カントは理性推論の重層的な歩みがたどりつく《不変なもの》を単純に真理とだけみない。それは詭弁かもしれない。あたかも真理であるかのように偽装し真理の仮面をかぶって虚偽が潜む可能性もある。その間隙をマルクスは拡大して子細に分析し、一見するところ、永遠の真理であるかのように現象する事態に虚偽＝仮象を洞察するのである。その意味で、カントの懐疑はマルクスを刺激して、さらなる探求に赴かせたにちがいない。

【要素分析法の変質】 「要素＝集合」の規定は、「同一対象」が観点を「旋回」すれば別の側面をみせ、「二重なもの＝双数的なもの（Dualität, duality）」として現象する事態の別の表現である。ところが、注目すべきことに、カントはこの観点の意味を、弁証論の本論としての「誤謬推論」と「アンチノミー」で、急変させる。たとえば、カントは第4アンチノミーへの注で、観測点の違いで、月が自転しているとも見えるし、自転していないとも見える例をあげる。もし観点を月の重心にとれば、月が地球に向けている側面は、(1) 真下→(2) 右側→(3) 真上→(4) 左側→(1') 真下の順で運動するように見えるから、「月は自転している（der Mond dreht sich um seine Achse 月は自己の回転軸を旋回する）」（B489）といえる。逆にもし観測者が観点を地球の重心にとれば、そこ

から見るとカントのいうように「月は地球につねに同じ側面を向けているから」(同)、「月は自転してはいない」(同)ように見える。観点の取り方次第で全く反対に見える。カントはこの例をアンチノミーが陥る自己矛盾の例証とする。この例証には、対称的複眼的な観点がしめされている。<sup>49)</sup> 『純粹理性批判』の原理論と方法論への対称的な要素分析、原理論の感性論と論理学への対称的な要素分析、論理学の分析論と弁証論への対称的な要素分析が連鎖して、最後の弁証論が方法論に再帰する。その最後の弁証論の本論で、要素分析法が二者択一の問題枠設定となるのである。

カントは弁証論の最初の「誤謬推論」でデカルトのテーゼ「我は思惟する、ゆえに我は実在する」を否定する前提として「思惟の超越論的主観X」(B404)という「単一のただ思惟するだけの主観」を提示し、思惟主観の「実在性」を拒否する。それはすぐれて観念的な魂(Seele)である。

ところが要素分析法は、「誤謬推論」に続く「アンチノミー」では、《あれかこれか》の二者択一の問題枠を措定する。対称的な方法を「アンチノミー」という二者択一の事態に適用する。超越論的論理学の前半の分析論では対称的・複眼的に論証を展開しながら、その後半の弁証論にくると、アンチノミーという「理性の仮象」を否定する二項対立的な枠組になる。ここで対称的な発想は外在的対立に転換していることに我々は気づくのである。

#### [10-2] 『資本論』の「不変の対称的構造」

[[『資本論』の《二重の三段論法》] カントに従うように、『資本論』にも「要素変換に関して不変の対称的構造」が存在する。『資本論』のその構造とは、①価値形態論・②商品物神性論・③交換過程論の3つの要素をつぎのように「前三段論法(prosyllogismos)」と「後三段論法(episyllogismos)」(B387-388)に交互に援用されている構造である。<sup>50)</sup>

- (前三段論法) I ①価値形態 ②商品物神性 ③交換過程
- (後三段論法) II ①価値尺度 ③流通手段 ②蓄蔵貨幣
- (前三段論法) III ②一般的範式 ③その矛盾 ①労働力商品
- (後三段論法) IV ②労働過程 ①価値増殖過程 ③両者の統一
- (前三段論法) V ③不変資本・可変資本 ①剰余価値率 ②絶対的剰余価値
- (後三段論法) VI ③相対的剰余価値 ②労賃 ①資本蓄積 [②原蓄 (注52)]

これを『資本論』第1部でより細部にまで分析すると、つぎのような2階の構造をなしていることが判明する。<sup>51)</sup> 結晶のような美しい対称性である。資本主義的生産様式はこのような対称性で編成されているのである。

- |                  |   |                |
|------------------|---|----------------|
| [前三段論法]          | : | [後三段論法]        |
| I {①} - ② - ③    | : | II {①} - ③ - ② |
| ② ③ ①            | : | ③ ② ①          |
| ③ ① ②            | : | ② ① ③          |
| ② <sup>52)</sup> |   |                |
| III {②} - ③ - ①  | : | IV ② ① ③       |

③	①	②	:	①	③	②		
①	②	③	:	③	②	①		
V	{③}	①	②	:	VI	{③}	②	①
①	②	③	:	②	①	③		
②	③	①	:	①	③	②		

〔カントの上向法・下向法の継承〕『資本論』における資本主義的生産様式を考察するさいの観点移動の規則を上記の(横の)第1行の(縦の)第1・2・3列で説明すると、こうである。

上記のIで、{①} 価値形態論の観点を基軸にして(記号{ }で表記)、そこから縦の第1列の②商品物神性論→③交換過程論とすすみ、ついで第1行の第2列の②に移行し、その縦の列の③交換過程論→①価値形態論→②商品物神性論とすすむ。さらに第1行の第3列の③交換過程論に移行し、その縦の列の①価値形態論→②商品物神性論とすすむ。このように、カントの前三段論法の「上向する方法」がIの群の9個(+1個②=10個)の項に貫徹する。つぎはIIに後三段論法の「下向する方法」が行と列で同じ順序で貫徹する。

カントのいう「前三段論法」は「上向する系列」である。マルクスは『資本論』より前に『経済学批判要綱』「序説」第3節で「経済学の方法」を経済学の歴史を参考にして論じ、「分析によって(durch Analyse)」具体的全体から抽象的な基礎概念にたどりつく「下向する(absteigen)方法」を念頭にして、抽象的な概念から具体的総体に向かう方法を「上向する(aufsteigen)方法」と命名した(MEGA, II/1.1, S.36)。これはまさにカントの前三段論法と後三段論法のそれぞれの別称である。ここにもマルクスのカント継承が判明する。つまり、マルクスは『資本論』でカントの前三段論法と後三段論法を交互に二重構造で援用しているのである。

マルクスは『資本論』第1部でこのようにカントの超越論的論理学を批判的に継承している。超越論的論理学は経験的實在性に媒介されないときにはただ思弁に耽溺し虚偽=仮象に陥るけれども、経験的實在性に媒介されたときには、真理を開示すると、カントはいう。しかしカントのいう経験的な前提をふまえた、超越論的演繹が虚偽=仮象に陥ることを『資本論』は論証する。無限態である価値は経験的な有限態である使用価値に現象する。その現象形態は、価値(V)と使用価値(U)が重層的対称的に置換する。価値という主体が使用価値という経験的實在態を媒介に「対象的仮象」(S.88: 訳126)を発生させる事態を論証する。カントが弁証論で論じた「欺瞞的仮象(trüglische Scheine)」(A369)は、まさに資本主義的生産様式が支配する社会の常態である。「仮象で充満する社会」が近代資本主義社会である。

〔〈仮象〉語の規則的使用〕このことを端的にしめすために、つぎに「仮象」語が『資本論』第1部で使用されている26回の頁の理論内容を示す。すでに「[5-2] マルクスの仮象論」で指摘したように、下記の数字は「仮象」語が用いられている頁である。

- 88, 89, 95, 97 (2回), 98 [商品物神性②]      106, 107 [交換過程②]  
 129 [貨幣の通流②]  
 264, 304 (2回) [労働日②]      325 [剰余価値の率と量②]



419, 422, 454, 465 [機械制大工業①]

534 [絶対的相対的剰余価値②] 555 [剰余価値率①]

561 [労賃③] 572 [時間賃金③] 574, 582 [出来高賃金③]

599 [単純再生産③] 609 (2回) [剰余価値の資本への転化③]。

「仮象」語の使用26回のうち、②商品物神性論の観点の個所では14回であり、③交換過程論の観点の個所では7回である。後者の③交換過程論の観点 [①V(U) : ②U(V)] は②商品物神性論の観点 [②U(V)] を内含するから、両方の観点は合計できる。全部で21回となる。①価値形態論の観点の個所では、②は5回だけ使用されている。①の個所で②を用いられたのは、その個所は《③交換過程論の観点 [V(U) : U(V)] → ②商品物神性論の観点 [U(V)] → ①価値形態論の観点 [V(U)]》という順序のなかで、「②の商品物神性論の観点の直後の①の個所」であったためであると判断される。②の仮象論的発想が①価値形態論の観点にも持続したのである。「仮象」語の使用の割合を計算すれば、②と③で80%、①で20%となる。このように、マルクスは『資本論』第1部でかなり高い割合で規則的に「仮象 (Schein)」語を使用していることが判明する。

すでに「5-2 マルクスの仮象論」でみたように、相異なる使用価値の私的交換関係は使用価値を捨象し価値を抽象するという二重作用の場である。無限遠点で抽象された価値(無限態)は使用価値(有限態)に現象する。使用価値に現象する価値は抽象的無限であるから、その表現媒態を無限に多くの使用価値にもとめる。価値(V)は使用価値(U)そのものであるかのように現象する[現象の表層U(深層のV)]。「価値」と使用価値の交換比率である「交換価値」を区別できず混同する錯誤・錯視の根拠がここにある。この錯視を主題として解明するのが第1章第4節の商品物神性論である。ここで『資本論』では初めて「仮象 (Schein)」語が使用される。それ以後、商品物神性論の観点で資本主義を考察するときは「仮象」語を基本用語として用い、あるいはその類似語である「物象化・神秘化・資本生産性」などの用語が規則的に使用される。

【継承される方法】 こうして、カント『純粹理性批判』の基本用語「仮象 (Schein)」が『資本論』に批判的に規則的に継承されていることが判明した。カントが超越論的論理学で分析論を真理規定の基準として論じるときにも、虚偽が真理装いで仮象する事態を合わせて批判的に論じるのは、余分な論理逸脱(齟齬)ではない。真理(W)規定をその反面である虚偽(F)ではない規定として裏打ちするためである [W = non F]。『純粹理性批判』の編成原理である要素分析は、単なる形式的区分ではなく、反対命題を取り込んで命題を規定することで充足する「複眼的な対称的な考察法」である。分析論では真理(W)と虚偽(F)とは対立する (W:F)。けれども、弁証論のアンチノミー論では二分された真偽はさらに二分され [W → (W+F)] [F → (F+W)]、真理(W)と虚偽(F)は相互に対称的に反対の関係に転回する [(W:F) : (F:W)]。アンチノミーのこの形式は交換過程論の構造 [V(U) : U(V)] と同型である。この形式で、価値形態が存立する「自己意識-意識-対象」も編成されている。カントの方法は、シンメトリーをなす『資本論』に継承されている。カントの『純粹理性批判』は『資本論』が樹立する豊かな地層となっているのである。

【『仮象の論理学』としての『資本論』】 カントは、理性が経験的データ無しに勝手に知性の活動を推論形式で結合する活動は「仮象の論理学」に陥るとして批判する。これに対してマルクスは、

いやそうではなく、経験的データを整合的に分析する場合でさえも、カントのいう「真理の論理学」にはならず逆に「仮象の論理学」になる場合がある。それは近代資本主義社会の富が全面的に商品形態をとる場合である。近代資本主義では、カントのいうように、超越論的分析論(→価値)が経験的データ(→使用価値)を整合的に媒介する「真理の論理学」の条件を形式的に満たす場合でさえも、「虚偽=仮象の論理学」に転回する。これがマルクスの『資本論』で「仮象」語を使用する戦略的意図である。すでに『経済学批判要綱』で、労働力商品の使用価値が価値=剰余価値をもたらすように、価値規定に媒介された使用価値が逆に経済的諸形態を規定する関係に注目している(MEGA,II/1.1,S.190)。この言明はそのようなカント批判を含意する。マルクスの「使用価値」概念は、いわゆる「歴史貫通的に」普遍的な富に限定されない。むしろそのように一面的に限定して疑わない観点こそが、仮象に囚われた観点であることを立証する概念なのである。

マルクスだけでなく、ヘーゲルが本質論冒頭や概念論冒頭で使用する「仮象」語も、カントの「仮象」語の批判的継承である。しかし『資本論』の「仮象」語の使用は、ヘーゲルよりも、遙かにカントに親近性がある。ヘーゲルは論理学で本質論と概念論に限定し「仮象」語を使用する一方、カント的な虚偽の意味を『法=権利の哲学』§ 83で使用する。論理学と法哲学で異なる意味で別個に使用する。これに対してマルクスは「合法的詐欺」=「虚偽」の意味で「仮象」語を『資本論』全巻を貫通して使用する点でもカント(批判)的なのである。

マルクスは、ヘーゲルの「仮象」語使用の分裂をカントの一貫性に復元しつつ、カントの「真理の論理学」を「仮象の論理学」に転回する。「ヘーゲル批判」と「カント批判」の二重の批判を「仮象」語の使用で論証する。筆者の「マルクスとカント」問題の背後には、このようなマルクスのヘーゲル=カント批判という二重の批判が控えている。

【反証可能性は何処にあるのか】 或るテキスト(『資本論』)と別のテキスト(『純粹理性批判』)とが重層的に一貫して対応することが、文献上の諸事実の理論的分析で論証されているとき、その対応諸関係の個々の項目に、別のテキストの対応可能性(例えば、ヘーゲル)を対置しても、その対置は何ら反証にならない。これは一般的に自明なことであり、なにもマルクス=カント関係に限定されない。有意味に一貫して連結する対応諸関係の論証の前にして、批判者が対置する個々の事例が相互に連結せずバラバラな場合は、その批判は何やら意味不明な発語をしていることになる。不自然なこの対置は反証にはならない。反証可能性は、その対応諸関係に内在する批判だけに存在する。本稿の場合は、『資本論』および『純粹理性批判』のテキストへの内在を前提諸条件にする。その前提で拙稿が論証する対応諸関係の批判的追思惟のみが、反証可能性を開くのである。カントのいう経験(認識)可能性と同じように、反証は無制約ではない。上記の制約諸条件のもとでのみ、反証は可能なのである。

#### 〈参考文献一覧〉(マルクスとカントを除き、アルファベット順)

Marx, Karl, *Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag Berlin 1962, 1969: 『資本論』 翻訳委員会訳 『資本論』 13 分冊、新日本出版社。

Marx, Karl, *Le Capital*, traduction de M. J. Roy, Editer, Maurice Lachtre et Cie, Paris: 『資本論』 フランス語初版本復刻版、極東書店、1967年。

Marx, Karl, *Capital*, translated Samuel Moore and Edward Aveling, Progress Publishers, Moscow 1965.

- Marx, Karl, *Capital*, translated by Ben Forkes, Penguin Books, 1976.
- Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag 1976.
- Kant, Immanuel, *Critique of Pure Reason*, translated by Paul Guyer & Allen W. Wood, Cambridge University Press, 1998.
- 原佑訳『純粹理性批判』平凡社ライブラリー、2005～2007年。
- 中山元訳『純粹理性批判』光文社文庫、全7巻、2010-12年。
- 石川文康訳『純粹理性批判』筑摩書房、2014年。
- コペルニクス『天体の回転について』矢島祐利訳、岩波文庫、1953年。
- Fantoli, Annibale, *Galileo. Per il Copernicanesimo e per la Chiesa*, Vatican Observatory Foudation 1997: アンニバレ・ファントニ『ガリレオ』大谷啓治監修・須藤和夫訳、みすず書房、2010年。
- ドゥルーズ、ジル『カントの批判哲学』國分功一郎訳、ちくま学芸文庫、2008年。
- ガリレオ『星界の報告』山田慶児・谷泰訳、岩波文庫、1976年。
- ヘンゲル、M『古代教会における財産と富』渡辺俊之訳、教文館、1989年。
- 廣松渉『カントの先験的演繹論』世界書院、2007年。
- 石川文康『カント 第三の思考』名古屋大学出版会、1996年。
- 岩田徹「超越論的論理学の構成に基づく一考察」『実践哲学研究』京都大学、2007年第30号。
- 『情況』2007年11・12月合併号「廣松渉『カントの先験的演繹論』をめぐって」。
- 川島武宜『所有権法の理論』岩波書店、1949年。
- 柄谷行人『トランスクリティークーカントとマルクス』岩波書店、2004年。
- ラヴジョイ、アーサー・O『存在の大いなる連鎖』内藤健二訳、ちくま学芸文庫、2013年。
- 牧野英二『遠近法主義の哲学』弘文堂、1996年。
- 松田克進「スピノザ」小林道夫編『哲学の歴史』第5巻、中央公論社、2007年。
- 三枝博音『日本に於ける哲学的觀念論の發達史』文圃堂、1934年。
- 三枝博音『哲学と文学に関する思索』（酣燈社、1947年）所収の論文「理性の内なる仮象（虚仮）の問題」（『哲学雑誌』1944年3月、4月、11月）。
- Spinoza, Benedictus de, *Opera quae supersunt omnia*; verausgegeben von H. E. Gottfried Paulus, in zwei Banden Jena, 1802-1803: MEGA, IV/1.
- Thomas, Josef G., *Sache und Bestimmung der Marx'schen Wissenschaft*, Peter Lang, Frankfurt am Main 1987.
- 内田弘「スピノザの大衆像とマルクス」『専修経済学論集』第34巻第3号、2000年3月。
- 内田弘「『資本論』の自然哲学的基礎」『専修経済学論集』2012年3月、通巻第111号。
- Uchida, Hiroshi, *Capital in Symmetry: The doctoral dissertation founds his lifetime project*, 『専修経済学論集』第117号、2014年3月。
- 内田弘『資本論のシンメトリー』社会評論社、2015年。
- 内田樹『映画の構造分析』晶文社、2003年。
- 内田義彦『資本論の世界』岩波新書、1966年。
- 宇野弘蔵『《資本論》と社会主義』岩波書店、1958年。
- ジジェク、スラヴォイ編著『ヒッチコック×ジジェク』鈴木晶・内田樹訳、河出書房、2005年。

## 〈註〉

- 1) 内田弘「『資本論』の自然哲学的基礎」『専修経済学論集』2012年3月、通巻第111号を参照。
- 2) カントの哲学用語 *Verstand* を「悟性」でなく「知性」と訳すべきであるという見解は、夙に三枝博音によってしめされている〔三枝博音『哲学と文学に関する思索』（酣燈社、1947年）所収の論文「理性の内なる仮象（虚仮）の問題」（『哲学雑誌』1944年3月、4月、11月）での指摘を参照（同書38頁以下）〕。第一批判の主題は、超越論的論理学の前半の分析論ではなく、後半の弁証論＝「仮象の論理学」

- であるという石川文康の見解（『カント 第三の思考』名古屋大学出版会、1996年）の源流も、石川はその名をあげていないけれども、三枝博音にある。
- 3) マルクスは自ら、パラドックスの定義をおこなっていないけれども、筆者がマルクスのテキストに読むパラドックスは、「或る前提がそれ自体を否定する結果を措定するパラドックス」だけでなく、「さらにその結果が最初の前提を措定するという自己否定を二重に展開するパラドックス」も意味する。内田弘『《資本論》のシンメトリー』（社会評論社、2015年、終章）を参照。
  - 4) 慧眼な読者は、このカント・アンチノミー批判が、『資本論』における個別資本の自由な競争が総資本にとって如何なる帰結（相対的剰余価値・利潤率の傾向的低下）を生み出すのかという論証問題に継承されていることを洞察するであろう。「終結＝始元」という円環体系をなす存在＝認識過程や「貨幣＝神の論証」も同じ継承関係にある。
  - 5) ガリレオ『星界の報告』（山田慶児・谷泰訳、岩波文庫、1976年）を参照。
  - 6) Annibale Fantoli, *Galileo. Per il Copernicanesimo e per la Chiesa*, Vatican Observatory Foundation 1997: アンニバレ・ファントニ『ガリレオ』（大谷啓治監修・須藤和夫訳、みすず書房、2010年、499-500頁）を参照。ラヴジョイによれば、中世形而上学が一番深刻な打撃を与えたのはコペルニクス説ではなく、1572年のティコ・ブラーエによるカシオペア座の新星の発見である。その発見は、地球以外の天体にも人間と似た生命が生息する可能性を開き、そこでも『聖書』物語が反復される可能性を示唆する。その可能性は従来の『聖書』物語の固有性・一回性を相対化したという。コペルニクス以後の天文学史には、このような神学的傲岸の危機意識が対応する。アーサー・O・ラヴジョイ『存在の大いなる連鎖』（内藤健二訳、ちくま学芸文庫、2013年、161頁）を参照。
  - 7) Benedictus de Spinoza, *Opera quae supersunt omnia*; herausgegeben von H. E. Gottfried Paulus, in zwei Banden Jena, 1802-1803. 松田克進「スピノザ」小林道夫編『哲学の歴史』第5巻、中央公論社、2007年、413頁を参照。
  - 8) ヘーゲルの論文「信仰と知」は第一批判のなかの或る順逆のタイトル「知と信仰」（B848）に因んでいる。
  - 9) 内田弘「スピノザの大衆像とマルクス」『専修経済学論集』第34巻第3号、2000年3月を参照。マルクスは1841年3月から4月にかけて、上記注2のパウルス編集のスピノザ遺稿集に収められた『神学・政治論』と『往復書簡集』から、評注なしに、独自の順序で抜粋ノートを作成した（MEGA, IV/1, 1974, S.233-251）。
  - 10) Kant, *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, *Kant Werkausgabe*, Band VIII, Suhrkamp 1977, S.851-2: カント「たんなる理性の限界内の宗教」北岡武司訳、『カント全集』第10巻、岩波書店、2000年、240-241頁。カントの宗教界の物神崇拜に対する批判にはプロテスタントの視座がすえられ、その視座から『純粹理性批判』を執筆する。
  - 11) 本論文も、引用にあたっては、慣例に従い『純粹理性批判』の初版の頁の頭にAをつけ、第2版の頁の頭にBをつけ、(B388)の如く原文の頁のみを指示する。本論文末の「参考文献」に掲げた原佑訳・中山元訳・石川文康訳および英訳を参照し訳文を作成した。
  - 12) マルクスは『経済学批判』でAggregat語を「現実的な諸物の無限の集合（ein unendliches Aggregat der wirklicher Dinge）」と使用している（Marx/Engels Werke Bd. 13, S.75）。「諸物」は要素である。
  - 13) 野家啓一は「要素は単独では存在しません。それは関数的連関のなかにしか存在しない」と考える（廣松渉『カント《先験的演繹論》』世界書院、2007年、第2部、214頁）。
  - 14) 『資本論』からの引用は、*Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag Berlin 1962, 1969: 『資本論』翻訳委員会訳『資本論』13分冊、新日本出版社、1982～89年から行い、その頁数は本文でのように略記する。
  - 15) 価値形態論におけるつぎの文を参照。「或る一つの商品、たとえばリンネルの価値はいまでは商品世界の無数の他の商品の要素で表現されている」（S.77: 訳107）。「要素＝集合」は『資本論』冒頭だけの問題ではないのである。
  - 16) 内田弘『資本論のシンメトリー』を参照。

- 17) この二重性は、カントの「始元と限界」の第一アンチノミーの止揚形態であることを意味する。
- 18) 英訳『資本論』をみると、Samuel Moore and Edward Aveling, Progress Publishers, Moscow 1965では、商品集合がaccumulation of commodities、要素形態がa single commodityにそれぞれ訳され、Ben Forkes, Penguin Books, 1976では、an immense collection of commodities、elementary formと訳されている。elementary formは適訳である。
- 19) ジル・ドゥルーズ『カントの批判哲学』國分功一郎訳、ちくま学芸文庫、2008年、35頁。
- 20) ドゥルーズはつぎのように指摘する。「『コペルニクスの転回』の根本的な理念はつぎの点にある。すなわち……客観の主観への必然的な従属の原理を説くことである。認識能力が立法行為を行うものであること、より正確に言えば、認識能力のなかには立法行為を行う何かがあるということを見いだしたことこそが本質的な発見であった」（ドゥルーズ前掲書、35頁）。
- 21) とはいえ、ヒュームの哲学は、『構想力・感性・知性・理性・表象など』、カントの哲学用語と共通する用語を準備していた。カントの超越論がそれらに哲学的活力を賦与したのである。
- 22) ほとんどの日本語訳では、この引用文における sich drehen を「回転する」と訳している。その訳では地球の「自転 (rotation)」なのか「公転 (revolution)」なのかが不明である。因みに、英語訳 (Immanuel Kant, *Critique of Pure Reason*, translated by Paul Guyer & Allen W. Wood, Cambridge University Press, 1998, p.110) は、revolves, revolve と「公転する」の意味に訳す。拙訳の「旋回する」は何かの周囲を円 (楕円) 運動する意味であるから「公転する」と同義である。なお、柄谷行人は『トランスクリティーク —カントとマルクス—』(岩波書店、2004年、311頁) で「コペルニクスの転回」に論究しながら、肝心の『純粹理性批判』のこの箇所を引用していない。『資本論』は第一義的に『純粹理性批判』に依拠するのに、この著書は『資本論』に潜在する『純粹理性批判』を明示していない。
- 23) コペルニクス『天体の回転について』矢島祐利訳、岩波文庫、1953年、16頁。カントのいう超越論的主観が存立する無限遠点が観点の変換を可能にし、コペルニクスいう対称性も可能にする。無限遠点こそ、同一物を複眼で観る「遠近法」の拠点である。牧野英二は、カントにおける「遠近法」の可能性を論じる際に、認識主体の身体と空間的位置を前提にする。この実在的前提は、デカルトのコギトが陥る誤謬推論の帰結と同じではないだろうか。牧野英二『遠近法主義の哲学』弘文堂、1996年、62頁以下参照。
- 24) 内田弘『『資本論』のシンメトリー』は、この三要素①・②・③が『資本論』の編成原理であることを論証した。
- 25) もちろん、sich drehen には「旋回する」のほかに「回転する」などの訳語がありうる。ただしこの動詞は地球が太陽の周囲を (楕円運動で) 回っているという「公転 (revolution)」を動詞で表現している。特に「回転する」・「回る」では「自転 (rotation)」との区別が曖昧であり、「公転」のニュアンスが的確に表現できないことに留意すべきである。
- 26) すでに内田義彦は『資本論の世界』(岩波新書、1966年、48頁、80頁) で、『資本論』の最初の要素分析、すなわち『資本論』の第1部・第2部=価値タームと第3部=生産価格タームへの区分に着目し、マルクスが前者を剰余価値生産の関係として規定し、後者を剰余価値の(レントとしての) 分配関係として規定したと指摘している。ただしこの著書には、『資本論』の基礎理論としての価値論 (価値形態論・商品物神性論・交換過程論の有機的関連) への論究や、『資本論』編成原理=「三重の要素分析法」のカントへの関係への論究は、一切ない。カントへの関連は除外できるとしても、価値論は『資本論』の正確な理解にとって不可欠な前提であろう。近代資本主義は (資本の可能態である) 価値が支配する体制である。「歴史貫通的な労働過程・協業・分業と見える事態」が実は生産資本循環の仮象形態であることは、価値の支配の観点から初めて見えてくる事態である。前掲内田弘『資本論のシンメトリー』の労働過程・協業・分業の箇所を参照。
- 27) 価値と交換価値を区別できない内外の『資本論』に関する著書・論文は、古典経済学への自らの逆戻りに気づいていない。古典経済学 (ペティからリカードまで、J.S. ミルは除外) と古典派経済学 (限界革命以前、J.S. ミルは入る) の区別もない。

- 28) 宇野弘蔵自身が『資本論と社会主義』で明言するように「三段階論（原理論・段階論・現状分析）」から「現状分析」も含め、実践の契機は反科学的イデオロギーとして一切排除されている。三段階論は、『純粹理性批判』に関連するとすれば、超越論的分析論にのみ対応する。三段階論では、外的触発から生まれた歴史的経験的事実が形而上学的存在に転化している。その本質的な点で、『資本論』とは隔絶するのではなからうか。本稿 [8] でみるように、マルクスはカントによる理論と実践の区別と媒介を『資本論』に摂取している。
- 29) 三枝博音は、なぜカントが「仮象の論理学」を創設したのかについて、つぎのように指摘している。「[カントは] 認識が眞理であるための徴標を求めたが、そのためにすでに論理学の外からの實質的な知識の確實性の必要を十分認め、而も眞であることの論理的徴標の問題につけて Wahrheit の論理学のみで足りるとせず、ここに Schein の論理学を創設してあるのである」（『哲学と文学に関する思索』酣燈社、1947年、43頁。初出「理性における仮象の問題」『哲学雑誌』1944年）。
- 30) 岩田徹「超越論的論理学の構成に基づく一考察」（『実践哲学研究』京都大学、2007年第30号）を参照。三枝博音は『純粹理性批判』の重層的な要素分析について、夙につぎのように注意している。「感性・知性・理性の関係は一から始まり二に進み三に到達するといふやうに、驟進的に進むものとのみ理解されてはならない。知性へ来たものは感性で興るものが来るのであるが、理性で終結するものは、單に知性に来たものではなくて、感性で興り知性にゆくものが綜じて完的に終結されるのである」（前掲書、65頁）。
- 31) 「空間は、外的に対象として我々に現象しうるすべてのものに関しては**実在性**をもつが、同時に、理性によってそれ自体で考察されるとき諸物に関しては**觀念性**をもつ」（B44、ポールド体は引用者）。
- 32) M.ヘンゲル『古代教会における財産と富』（渡辺俊之訳、教文館、1989年）によれば、後3世紀頃の古代ローマ教会は、神の賜物である富の寄付行為を富者の義務と位置づけ、貧者介護・社会福祉のための資金提供者として富者に協力を求めた。それに応えれば、経済的富者は道徳的賢者にもなる。他方で、百年のちの後4世紀の東方の最大都市アレクサンドリアには、自己労働の成果を自分のために使うことは当然の権利である（労働と所有の同一性）と主張する裕福な労働者が多勢いた。「彼らにとって唯一の神は貨幣である」（同書144頁）。「神＝貨幣」はマルクスの独断ではない。
- 33) この26回のうち、107頁と304頁（2回のうち1回）の2回はScheins、その他の25回はすべてScheinであり、ScheinとScheinesは用いられていない。『ドイツ・イデオロギー』以来、Versachlichungと対語で用いられてきたEntfremdungも『資本論』第1部ではただ1回（420頁）で用いられている。Dietz版『資本論』第1部の事項索引には仮象（Schein）はまったく検出されていない。
- 34) 『純粹理性批判』で、仮象（Schein）としての誤謬推論につづくアンチノミー論に対応して、『資本論』でもただし1回、「二律背反（Antinomie）」語が出てくる。資本家の権利と賃労働者の権利がともに「商品交換の法則」に合致しているので、結局、対抗力（Gewalt）が事態を決着をつける指摘する箇所（S.249: 訳399）である。
- 35) 前掲書『資本論のシンメトリー』では、『資本論』を②商品物神性論の観点から考察するさいに、マルクスがこの「仮象」語や「神秘化・資本の生産性」などの用語を規則的に用いていることが指摘されている。
- 36) マルクスはすでにアリストテレス『デ・アニマ』ノート（1840年前後）に記入した評注で、理性（nous）が総合判断形式で虚偽（pseudos）を眞理（alētheia）にすり替える誤謬推論について指摘している。前掲論文、内田弘「『資本論』の自然哲学的基礎」を参照。
- 37) 「諸商品の交換価値を明白に特徴づけるものは、まさに使用価値の捨象である」（S.52: 訳64）。経験可能態である使用価値が消滅し、それ自体では経験不可能な価値が抽象される。この規定は『法＝権利の哲学』§63の次の規定を継承する。「物件のこの一般性の単純な規定性は、物件の特殊性から生じるので、この独自の質は同時に捨象される（abstrahiert wird）。物件のこの一般性こそ、物件の価値（der Wert der Sache）である」。
- 38) カントにとって「思惟する私」と「思惟される私」への区別＝二重化はアプリアリな前提である。

- 人間の認識能力の構造分析が第一義であって、なぜその構造が可能なのかは、困難を極める問いである。ただ指摘する。カントやマルクスが援用した「二重化」は、「相手に自己の根拠をもつという人間の社会的共同存在性」に根拠をもつではなからうか。マルクスは「差異論文」で神の存在証明の仕方として (1)「空虚な同義反復を使う方法」と (2)「本質的な人間の自己意識の存在証明」をあげている (MEGA, I, S.90-91)。**[7-2]** でみるように、(2) はマルクスにとって貨幣が生成する場 (貨幣=神) である。
- 39) この逆転に相当する事態を、ラカンの映画作品『裏窓』分析を援用して、ムラン・ボジョヴィッチはつぎのように分析する。「他の主体に眼差しを向けるとき、私は彼あるいは彼女を対象として規定しようとする。しかし、その主体もまた、主体としての私の地位を否定し、私を対象として規定することができる。……《他者に見られていること》は《他者を見ていることの真理》である」(スラヴォイ・ジジエック編著『ヒッチコック×ジジエック』鈴木晶・内田樹訳、河出書房、2005年、246頁)。「自己意識-意識-対象」をめぐるカント=マルクスの分析はラカン=ヒッチコックに生きている。
- 40) このように、結論がつぎの大前提になりその結論が導き出される論法は、問い (Qi) とその解 (Ai) がつぎの問い (Qj) を提起する『資本論』の論法 [Qj (QiAi) Aj] と同型の「並進対称 (translational symmetry)」である。これは先に『純粹理性批判』と『資本論』に分析した「三重の二分法」の別の表現である。『資本論』の哲学史的 (論理的) 源流はカントの『純粹理性批判』にある。前掲書『『資本論』のシンメトリー』 (特に第1章と終章) を参照。
- 41) 牧野英二は「カントの立場で言えば、超越論的自我の問題から《我から我々へ》と論理的に展開することは困難です」と観る (『情況』2007年11・12月合併号、23頁)。
- 42) 牧野英二はつぎのように指摘する。「カントの批判哲学は、そもそものはじめから、理論哲学としての射程と実践哲学としての射程を重ね合わせるようにして構想されているとみるべきです」(廣松渉『カントの《先験的演繹論》』世界書院、2007年、第2部、171頁)。
- 43) 「人格性の概念は実践的な使用にとって必要かつ十分である」(A365-366)。
- 44) 時枝誠記と三浦つとむが提示した独自の日本語文法がその一例である。筆者は『『資本論』のシンメトリー』で、『資本論』(第1部)の記述例から、そこに貫徹する規則=文法を導き出し、その規則で『資本論』(第1部)の全体を解説した。その規則は内生的である。
- 45) カントは、この上昇し条件づける系列の全体を把握することはできないけれども、その前提となる第一のものが最上位に存在し、この系列に条件の全体が含まれていると想定することが、理性の要求であるという (B389)。マルクスは、最上位のものは研究者の表象に思いうかべられる具体的な全体 (人口) であり、それには「上昇する経済学の諸体系」の最後で到達すると想定する (MEGA, II/1.1, S.36)。抽象的なものが終局のカントの体系と具体的なものが終局のマルクスの体系は、対称性をなす。
- 46) 川島武宜『所有権法の理論』(岩波書店、1949年)の特に、「第3章 近代的所有権の観念性と絶対性」を参照。「近代法において所有権は、その主体者の現実的支配の有無に関係なき・客体の観念的な帰属、すなわち物に対する支配可能性という観念的關係である」。
- 47) 内田弘『『資本論』の自然哲学的基礎』『専修経済学論集』2012年3月、第46巻第3号 (通巻111号) を参照。
- 48) 「《私が見たもの》の他に、そこに居合わせて《私を見ていた誰か》の視覚記憶も、出来事の物語的再現のためには不可欠である」(内田樹『映画の構造分析』(晶文社、2003年、190頁)。
- 49) 「1つの学的体系の中で、その体系のパラダイム (規範) に反するようなものが生まれる。それは変革につながるものである」(森毅『魔術から数学へ』講談社学術文庫、1991年、128頁)
- 50) 前掲書『『資本論』のシンメトリー』第1章の末尾「総括と展望」を参照。
- 51) その構造が『資本論』第1部のどの個所に対応しているかについては、上記の注と同じ個所を参照。
- 52) ここだけ例外的に4つの項からなる。②商品物神性論の観点は、『経済学批判要綱』や『資本論』第1部の原蓄論、『資本論』第3部「主要草稿」の最後 (第7章) と同じように、『資本論』の基軸となる観点である。